

平成25年度

# 研究活動報告



桜美林大学 加齢・発達研究所

## はじめに

桜美林大学加齢・発達研究所の平成25年度研究活動報告書をお届けいたします。

今年度の研究所は、老年学研究科特任教授並びに教授7名の研究員に加えて、学外の客員研究員7名、さらには、研究員と共同で研究を進める連携研究員25名の協力を得て研究事業を進めてまいりました。

本報告書は、上記の研究員による平成25年度の研究活動の概要、研究業績及び外部からの研究助成の状況などについてまとめたものです。今年度も、高齢者のサクセスフル・エイジングを念頭においた、医学的、心理学的、社会・福祉学的側面からの課題解明に向けて多岐にわたる調査研究活動が展開されました。その成果を、論文、著書として刊行したほか、内外の学術集会において多数の発表がなされました。これらの業績一覧は、当研究所ホームページにも掲載しています。

また、研究員の意欲的な研究活動が、日本学術振興会を初めとして多くの外部研究費の獲得につながっていると同時に、平成26年度からの新たな研究費の獲得申請にも意欲的に取り組んでいます。次年度も、高齢社会における課題解決に向けた実証研究の継続・発展が大いに期待されるところです。

今後は、これまでの研究活動で得られた成果を広く地域社会へ還元・貢献する事業の展開も研究所の大きな役割であると考えています。

今後とも当研究所に対するご支援、ご指導をよろしくお願い申し上げます。

2014年3月

桜美林大学加齢・発達研究所

所 長 芳 賀 博



## 平成25年度 研究活動報告

### 研究員（常勤）研究活動報告

1) 芳賀 博	.....	1
2) 新野 直明	.....	5
3) 長田 久雄	.....	8
4) 白澤 政和	.....	11
5) 杉澤 秀博	.....	20
6) 渡辺修一郎	.....	22
7) 直井 道子	.....	26

### 客員研究員研究活動報告

1) 植木 章三	.....	28
2) 河合千恵子	.....	32
3) 澤岡 詩野	.....	34
4) 柴 喜崇	.....	36
5) 仙波由加里	.....	39
6) 中野いく子	.....	42
7) 兪今 (YU JIN)	.....	44

## 連携研究員研究活動報告

1) 池田 龍也	46
2) 植田 拓也	49
3) 植田 大雅	47
4) 上野 佳代	50
5) 江川 賢一	51
6) 遠田 恵子	52
7) 皆田 良子	54
8) 川内 由加	55
9) 北井 純子	56
10) 木本 明恵	57
11) 久喜美知子	58
12) 久米喜代美	60
13) 小林由美子	62
14) 齋藤 崇志	63
15) 高田 佳子	65
16) 寺山圭一郎	66
17) 東方 和子	68
18) 徳田 直子	69
19) 中辻 萬治	70
20) 平林 規好	73
21) 堀内 裕子	74
22) 前田志名子	77
23) 松永 博子	79
24) 吉田 綾子	81



## 1. 研究課題

- (1) 高齢者の社会的ネットワーク形成に関する介入研究
- (2) 高齢者における介護予防に関する研究
- (3) 地域包括ケアを支える医療機関と保険者機能連携に関する研究

## 2. 研究活動の概要

### (1) 高齢者の社会的ネットワーク形成に関する介入研究

①地域高齢者の社会的役割の創出のための活動を通じて社会的ネットワークの形成と促進に及ぼす効果を明らかにすることを目的として、神奈川県座間市、福島市、宮城県大崎市において平成10年度～12年度に介入研究（科学研究費による）を行ったが、その成果をまとめ、日本公衆衛生学会で発表（2本）するとともに、学術誌（ISRN Geriatrics）にも投稿し、掲載された。

②北海道江別市においても同様の介入研究を展開中であるが、今年度は、地域のつながりづくりを強化するための市民と研究者によるシンポジウムを実施した。また、社会参加促進型ヘルスプロモーションプログラムの地域活動や近所つき合いに及ぼす効果について日本老年社会学会で発表した。

### (2) 高齢者における介護予防に関する研究

①宮城県登米市の高齢者を対象とするアンケート調査への回答者1,178人のデータに基づいて、筋骨格系（肩、腰、膝）の痛みの有無と身体機能（長坐位からの立ち上がり時間、生活体力）との関連を分析した。その結果、立ち上がり時間は、腰痛と膝痛を合併している者において有意に長かった。また、腰痛または膝痛を有する者、そしてとくにこれらの両方を有する者は、生活体力の低値と有意に関連していた。下肢の痛みの予防や対処法のさらなる研究が必要であることが示唆された。本研究の成果は、国際老年学会議において発表した。

②研究課題名「地域高齢者を学生に見立てたゼミナールによる新たな介護予防プログラムの提案」は、地域の介護予防活動に関心のある高齢者を対象としたゼミナールを開講し、行政・地域包括支援センター等の研究者やゼミナール参加者とが双方向性・相互啓発性の高い討論（学習）を繰り返す中で、地域特性に応じた介護予防プログラムの提案を目指す。さらに、参加者によるプログラムの実践を通じて地域全体への波及効果を検証することを目的としている。2013年度はその初年度として、厚木市の2地区（介入地区、対照地区）の65歳～79歳の2,000名を対象として11～12月にかけて郵送によるベースライン調査を行った。回収率は72.3%と比較的高率であっ

た。次年度は、介入地区において10回のゼミナールを開催し、参加者による新たな介護予防プログラムの開発を行う予定である。

### (3) 地域包括ケアを支える医療機関と保険者機能連携に関する研究

平成24年度に行った老人保健健康増進事業「地域包括ケアを支える医療機関と保険者機能連携に関する調査研究事業」のデータに基づいて、分析を進めた。その結果を「地域包括ケアシステムにおける在宅医療体制と連携に対する課題と方策の検討」及び「一般高齢者を対象とした介護予防事業利用意向に関連する要因の検討」と題して、学会発表をおこなった。また、これらの成果を、今年度中に学術誌に投稿する予定である。

## 3. 研究業績

### 【著書】

- 1) 芳賀博、健康づくり・社会参加；高齢者保健福祉マニュアル、安村誠司、甲斐一郎 編、南山堂、19-32、2013年

### 【論文】

- 1) 芳賀博：自治体における高齢期の健康増進, Geriatric Medicine, 51 (9) , 953-956, 2013.
- 2) Kimura M, Yamazaki S, Haga H, Yasumura S : The prevalence of social engagement in the disabled elderly and related factors, ISRN Geriatrics, 1-8, Article ID 709823, 2013.
- 3) 竹之下信子、佐藤美由紀、芳賀博、池邊敏子：地域在宅高齢者の社会貢献活動に関する要因、千葉科学大学紀要、6、119-129、2013.
- 4) 池田晋平、内田恵美子、芳賀博：通所リハビリテーション利用者の主観的健康感と関連する心理・社会的要因、老年学雑誌、4、11-23、2014.

### 【学会発表】

#### I. フォーラム・自由集会

- 1) 芳賀博、自主企画フォーラムⅡ、サクセスフル・エイジングのモデルの統合に向けた試みー医学、歯学、心理学、社会学からのアプローチ、第55回日本老年社会学会、大阪、2013年6月
- 2) 芳賀博、地域包括ケア体制の確立に向けて、自由集会「高齢者が安心して暮らせるコミュニティとは」、第72回日本公衆衛生学会、三重、2013年10月

#### II. 一般演題

- 1) Y. Shiba, S. Aanzai, H. Haga: Social activity of Japanese elderly is associated with paid work activity and favorable physical functioning-related QOL, THE 20th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics, Seoul, Korea, 2013.6
- 2) S. Anzai, H. Haga, H. Honda, S. Ueki: Association between musculoskeletal pain and physical



- 利活用に関する課題、第17回日本アダプテッド体育・スポーツ学会、仙台、2013年12月
- 16) 吉田裕人、植木章三、高戸仁郎、犬塚剛、荒山直子、芳賀博：地域高齢者の運動機能低下が将来の医療費に及ぼすインパクト、第24回日本疫学会学術総会、仙台、2014年1月

**【科研費などの助成金】**

1) 科学研究費 基盤研究 (B)

研究課題名：地域高齢者を学生に見立てたゼミナールによる新たな介護予防プログラムの提案 (分担研究者)

2) 科学研究費 基盤研究 (C)

研究課題名：高齢者の地域社会における役割の見直しに基づくヘルスプロモーションプログラムの評価 (分担研究者)

## 1. 研究課題

介護予防に関する研究

## 2. 研究活動の概要

東京都中央区で転倒予防教室を実施し、その効果を検討する試みを継続した。転倒予防教室は、1回10～15名の住民に対して、運動、講義、フットケアなどからなる2時間程度のプログラムを1週間間隔で4回提供し、さらに、約1年後にフォローアップとして同様のプログラムを実施するという内容である。今年度のフォローアップは、2012年度教室参加者に実施した。今年度も、昨年度に開発した転倒予防のための教育用冊子、ならびに壁掛け教材、タオル教材、マグネット、ステッカーの啓発用教材を用いる包括的転倒予防教育「SAFETY on！12週間プログラム」と称する教育プログラムを実施した。転倒発生、筋力や歩行能力などの身体的要素、満足度やうつ状態などの精神的要素、人間関係などの社会的要素に対する効果について、前後比較、教材を使用しなかった対照群との比較からこの包括的教育プログラムの効果に関する分析・検討を行う予定である。また、教室参加が、参加者相互の人間関係に与える影響についての調査、検討を開始した。

さらに、同中央区内で、認知症予防活動をも想定した、世代間交流プログラムの企画、運営に参加、協力した。

また、東京都立川市の老人ホームにおいて、転倒予防プログラムとして運動・体操教室を企画、実施した。体操に加え、ノルディックウォーキングも用いたプログラムを継続している。

その他に、研究員とともに考案したプログラム（ハッピープログラム）による地域高齢者のうつ予防を目的とした活動・研究を継続した。東京都府中市、新潟県長岡市でプログラムを用いた教室を実施し、効果に関する調査、分析結果の一部を発表した。

## 3. 研究業績

### 【著書】

- 1) 新野直明：高齢者における健康と寿命、高齢者保健福祉マニュアル（安村誠司、甲斐一郎編）、南山堂、東京、5-17, 2013



## 【論文】

- 1) 八島妙子、新野直明：地域在住高齢者の生活リズムの変化、老年学雑誌、査読有、3巻、101-111、2013

## 【学会発表】

- 1) 松本直人、新野直明、他：排気量指標による休息姿勢の比較検討、第68回日本体力医学会、東京、2013年9月
- 2) 亀井智子、新野直明、他：地域在住高齢者を対象とした包括的転倒予防プログラム「SAFETY on!」の開発と転倒予防効果検証のためのランダム化比較試験研究プロトコル、第18回聖路加看護学会、2013年9月
- 3) 松本直人、新野直明、他：喘息児における休息姿勢の選択傾向、第22回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会、東京、2013年10月
- 4) 平松万由子、新野直明：グループホームにおける終末期ケアの研究、第72回日本公衆衛生学会、三重、2013年10月
- 5) 梶井文子、新野直明、他：地域在住高齢者の転倒予防実践講座受講前後の食事・栄養に関する知識・食行動の変化、第72回日本公衆衛生学会、三重、2013年10月
- 6) 入江由香子、新野直明、他：地域在住高齢者への転倒骨折予防実践講座が体力に及ぼす影響－転倒経験に着目して、第72回日本公衆衛生学会、三重、2013年10月
- 7) 千吉良綾子、新野直明、他：転倒予防実践講座におけるフットケア講座受講者のフットケアに関する知識と行動の変化、第72回日本公衆衛生学会、三重、2013年10月
- 8) 佐藤美由紀、新野直明、他：地域包括ケアシステムにおける在宅医療体制と連携に対する課題と方策の検討、第72回日本公衆衛生学会、三重、2013年10月
- 9) 松本直人、新野直明、他：地域在住成人喘息患者における休息姿勢の選択傾向、第72回日本公衆衛生学会、三重、2013年10月
- 10) 八島妙子、新野直明：在宅高齢者の主観的な生活リズムの性差に関する研究、第20回日本未病システム学会、東京、2013年11月
- 11) 山科典子、新野直明、他：一般高齢者を対象とした介護予防事業利用意向に関連する要因の検討、第8回日本応用老年学会大会、札幌、2013年11月

## 【科研費などの助成金】

- 1) 文科省科研費基盤B：在宅認知症高齢者のための学際的チームの連携強化を支援する評価システムの開発と検証（分担）
- 2) 文科省科研費挑戦的萌芽研究：地域高齢者のための包括的転倒予防SAFETY on!プログラムの開発と効果の検証（分担）
- 3) 文科省科研費基盤C：高齢者のうつ予防のためのポピュレーションアプローチの実証研究（分担）

#### 【その他の活動】

- 1) 「高齢期のうつ予防事業についてー「はっぴいプログラム」の取り組みー」、ダイヤ高齢社会研究財団シンポジウム、2013年9月
- 2) 「高齢者の転倒のメカニズムと予防について」、社会福祉法人至誠学舎立川至誠ホーム 国分寺地域相談センターなみき介護予防教室、2013年9月
- 3) 「高齢期のこころとからだの変化とつきあい方」、鎌倉市地域サポーター養成講座、2013年9月
- 4) 「老年期におけるこころとからだの変化」、社会福祉法人至誠学舎立川至誠ホーム家族職員勉強会、2014年1月

## 1. 研究課題

- (1) ハンセン病療養所入所者におけるライフレビュー
- (2) 心理機能の発達と加齢に関する研究

## 2. 研究活動の概要

### (1) ハンセン病療養所入所者におけるライフレビュー

本年度は、邑久光明園を訪問し、園長等から説明を受けた。また、文献研究、多磨全生園入居者に対する調査の準備を行った。

### (2) 心理機能の発達と加齢に関する研究

本年度は、高齢者の食物選択動機、社会情動選択性理論、レジリエンス、シルバー人材センターの介護予防効果に関する研究を行った。

## 3. 研究業績

### 【著書】

- 1) 長田久雄、安村誠司・甲斐一郎編、高齢者保健福祉マニュアル・高齢者の自己実現、南山堂：東京、2013.6.15、33-34
- 2) 高橋亮・長田久雄、横谷進編、成長障害のマネジメント改訂3版 VI、成長障害児の社会的心理的問題とケア、医薬ジャーナル社：大阪市、164-171
- 3) 長田久雄、中島健司・天野直二・下濱俊・富本秀和・三村将編、認知症ハンドブック、非薬物療法A認知リハビリテーションのエビデンス、医学書院、2013.11.15、256-262
- 4) 長田久雄、清水裕子編、ヒューマンケアと看護学、第4章第4節実験と調査、第6節論文の構成、2013.12.20、163-168、177-180
- 5) 長田久雄、家族のココロを軽くする認知症介護お悩み相談室、中央法規、2014.1.10

### 【論文】

- 1) 菊池和美・長田久雄、地域コミュニティにおける高齢者の「犬の散歩」をきっかけとした交流」、2013.8.31、応用老年学、第7巻第1号、33-41

- 2) 池内朋子・長田久雄、社会情動的選択性理論の研究に関する文献的展望－時間的展望を中心として－、2013.8.31、応用老年学、第7巻第1号、51－59

#### 【学会発表】

- 1) 加藤佐千子・長田久雄、生活機能の高い男女高齢者の「食物選択動機」の構造－多母集団分析による検討－、2013.5.19、日本家政学会第65回大会研究発表用要旨集、127、日本家政学会、昭和女子大学
- 2) 加藤佐千子・長田久雄、生活機能の高い高齢者用食物選択動機質問票（FCQ-E）の妥当性の検討、2013.6.4－6、老年社会科学第55回大会報告要旨号、35（2）、207、老年者書科学会、大阪国際会議場グランキューブ大阪
- 3) Sachiko KATO, Hisao OSADA, THE MOTIVES FOR FOOD CHOICE BY ELDERLY JAPANESE LIVING IN THE COMMUNITY: THE DIFFERENCE ACCORDING TO GENDER, AGE, AND LIVING ARRANGEMENTS, 2013.6.23－27, The 20th IAGG world congress of gerontology and geriatrics, International Association of Gerontology and Geriatrics, Seoul, Korea
- 4) Ryo Takahashi, Takashi Yoza, Shigeki Saima and Hisao Osada, 106) Degree of obesity (BMI) and health consciousness of people in the suburbs of Vientiane Laos, 27th Annual European Health Psychology Society, Bordeaux, France, 2013.7.17
- 5) Hidemi Mori, Hisao Osada, 624) The mediate role of condependent tendency in stress model in Japanese nurses, 27th Annual European Health Psychology Society, Bordeaux, France, 2013.7.18
- 6) Ikeuchi, T. & Osada, H. (2013, August) , Future Time Perspective Scale on Japanese Older Adults, American Psychological Association 121th Annual Convention Program 2013, 121th Annual Convention of the American Psychological Association, Honolulu, Hawaii, USA
- 7) Kazumi Kikuchi, Hisao Osada, Dog Ownership in Japan: Communication Tool for isolated Elderly in the Community, 2013.7.21, 2013 AVMA Annual Convention & IAHAIO, Chicago, USA
- 8) 松本直人・山口育子・新野直明・長田久雄・渡辺修一郎、休息姿勢の肺気量指標による検討、2013.9.23、第68回日本体力医学会大会、日本体力医学会、日本教育会館
- 9) 松本直人・齋藤弘樹・新野直明・長田久雄・渡辺修一郎、喘息児における休息姿勢の選択傾向、2013.10.11、第23回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会、日本呼吸ケア・リハビリ学会、東京ドームホテル
- 10) 長田久雄・横谷進・田中敏章、SGA性低身長児における成長ホルモン長期投与時の心理社会的特徴に関する検討、2013年10月11日、第47回日本賞に内分泌学会学術集会、プログラム・抄録集、161、2013年10月10日～12日、浅草ビューホテル

**【科研費などの助成金】**

- 1) ハンセン病療養所入所者におけるライフレビュー（課題番号24530888分担研究者）

**【その他の研究活動】**

とくになし。

## 1. 研究課題

- (1) 高齢者の地域のネットワークづくりの方法
- (2) ケアマネジメントの効果について
- (3) 災害時のソーシャルワークについて
- (4) 高齢者ケアマネジメントと障害者ケアマネジメントの共通点と相違性
- (5) ソーシャルワークの評価について
- (6) 福祉用具専門相談員の福祉用具サービス計画作成過程について

## 2. 研究活動の概要

### (1) 高齢者の地域のネットワークづくりの方法

これについては、実践的な観点から個人支援と地域支援を結びつけることとして、地域のネットワークづくりについて一定の研究成果を得ることが出来た。特に、支援困難事例の検討から地域のニーズを導きだし、ニーズ充足方法についての実証的な成果をあげることが出来た。以上は、2013年2月に刊行した『地域のネットワークづくりの方法－地域包括ケアの推進に向けて』（中央法規出版）をもとに、平成25年度挑発的萌芽研究「ケースマネジメントとコミュニティマネジメントの連結によるソーシャルワーク論に関する研究」（研究代表：白澤政和）でもって、先駆的な地域包括支援センターや社会福祉協議会での地域ニーズの導き出し方およびニーズの充足方法についての実証研究を深めた。

### (2) ケアマネジメントの効果について

客観的QOLを尺度化し、ケアマネジャーと利用者のマッチングによるパネル調査を4度（4年間）実施してきたが、そこから身体・心理・社会面で構成される客観的QOL尺度化を試みている。これについては、昨年度までは老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）「介護支援専門員の資質向上とケアマネジメントのあり方に関する調査・研究事業」（研究代表：白澤政和）でもって進めてきたが、今年度は平成23年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（A））「ソーシャルワークの評価方法と評価マニュアル作成に関する研究」（研究代表：白澤政和）の間接経費を活用して実施した。

### (3) 災害時のソーシャルワークについて

災害ソーシャルワークの枠組みを明らかにし、一般的なソーシャルワークとの共通点と類似点を明らかにし、それを教育カリキュラムに反映していく。これについては、原案的なものとして、昨年度はみずほ福祉助成財団の補助を受けたが、今年度からは三菱財団からの「災害ソーシャルワークの理論化と教材開発・教育方法の体系化に関する研究」への研究助成を社団法人日本社会福祉士養成校協会が受けて、外部から被災地へのソーシャルワーカー派遣マニュアルの作成を行っている。

### (4) 高齢者ケアマネジメントと障害者ケアマネジメントの共通点と相違性

障害者ケアマネジメントでは、時系列での利用者とケアマネジャーのマッチングでの変化を調査分析している。これは厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（身体・知的等障害分野））「障害者のQOL評価に基づくケアマネジメント手法開発の研究」（研究代表：白澤政和）で行っており、この研究と上記（2）の高齢者ケアマネジメントに関する研究を合わせて、両者の比較研究を行っている。

### (5) ソーシャルワークの評価研究

障害者、患者、児童に対するソーシャルワークについて、3年間で、ソーシャルワーク実践およびソーシャルワークの制度について評価研究を行ってきたが、その結果をもとに、今年度は、「ソーシャルワーク実践の評価マニュアル」および「ソーシャルワークの制度評価マニュアル」の作成を進めている。これは、平成24年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（A））「ソーシャルワークの評価方法と評価マニュアル作成に関する研究」（研究代表：白澤政和）でもって、実施している。

### (6) 福祉用具専門相談員の福祉用具サービス計画作成過程について

2012年度から義務化された福祉用具専門相談員の福祉用具サービス計画書の作成について、ケアマネジメントとの関係をもとにしたその過程を明らかにし、作成過程の調査結果をもとに、ガイドラインの作成を行った。これは、平成25年度老人保健健康増進等事業「福祉用具専門相談員の質の向上に向けた調査研究事業」でもって実施した。

## 3. 研究業績

### 【監修】

- 1) 『知って得するこれからのあんしん手帖』白澤政和、フランスベット株式会社、pp.1～113、2014年

### 【編著書】

- 1) 第1章「ケアマネジメントの構成」、第2章「ケアマネジメントの特徴」、第3章「居宅におけるケアマネジメントの過程とケアプラン」、第4章「ケアプランの作成・実施の特徴」、第

- 5章「地域ネットワーク」、第6章「社会福祉施設におけるケアマネジメント／ケアプラン」白澤政和、pp.1～70、白澤政和・蛭江紀雄編著『改訂 ケアマネジメント—在宅・施設のケアプランの考え方・つくり方』全国社会福祉協議会、2013年
- 2) 第1章「人間に対する価値観」白澤政和、pp.2～21、第7章「尊厳を維持した介護事例」pp.142～144、pp.152～154、pp.167～169、白澤政和編『人間の尊厳と自立 第2版』ミネルヴァ書房、2013年
- 3) 第1章2「ソーシャルワーカーの災害への初期対応（発生直後）」pp.44～47、白澤政和、『災害ソーシャルワーク入門～被災地の実践知から学ぶ～』上野谷加代子監修、社団法人日本社会福祉士養成校協会編集、2013年
- 4) 『居宅サービス計画ガイドライン Ver.1 エンパワメントを引き出すケアプラン』の刊行にあたって」白澤政和、『居宅サービス計画ガイドライン Ver.1 エンパワメントを引き出すケアプラン』pp.1～298、全国社会福祉協議会、2013年

#### 【編著内論文】

- 1) 「はじめに」pp.3～4、4章4-1「地域包括ケアへのソーシャルワーク活動」pp.186～211、「あしがき」pp.249～251、白澤政和、『躍進するソーシャルワーク活動 「震災」「虐待」「貧困・ホームレス」「地域包括ケア」をめぐる』日本社会福祉士会・日本精神保健福祉士協会・日本医療社会福祉協会・日本ソーシャルワーカー協会・日本社会福祉士養成校協会・日本精神保健福祉士養成校協会・日本社会福祉教育学校連盟共著、中央法規出版、2013年

#### 【論文】

- 1) 「介護支援専門員の援助実践における困難感の構成要素」斐孝承・白澤政和他、『介護福祉学』vol.20-1、pp.73～82、2013年
- 2) 「東日本大震災における居宅介護支援事業所と地域包括支援センターによる利用者の安否確認の実態の比較と課題—岩手県・宮城県の沿岸部と内陸部の比較をもとに—」岡田直人・白澤政和・峯本佳世子、『厚生指針』vol.60、No.11、pp.33～40、2013年
- 3) 「ケアにおける分断化の諸相とそれへの対応」白澤政和、『現代の社会病理』No.28、pp.3～19、日本社会病理学会、2013年
- 4) 「地域包括ケアとは」白澤政和、『日本認知症ケア学会誌』第12巻第3号、pp.553～562、2013年
- 5) 「利用者や家族介護者、他の社会資源との関係構築後に介護支援専門員が行うアセスメントにおける情報把握の構造」綾部貴子・白澤政和他、『社会福祉学』第54巻第3号、pp.67～78、2013年
- 6) 「介護保険法と障害者総合支援法でのケアマネジメントが学び合うこととその課題」白澤政和、『精神科臨床サービス』第14巻第2号、pp.22～29、2014年



## 【その他論文】

- 1) 「介護保健制度創設の背景」 pp.64～67、「介護保健制度の枠組み」 pp.68～71、「サービス利用の過程と利用状況」 pp.72～75、「介護保険制度の将来と地域包括ケア」 pp.76～79、白澤政和、『NHKテキスト 社会福祉セミナー』2013.12～2014.3月号、日本放送協会・NHK出版、2013年

## 【報告書】

- 1) 『平成25年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（A））研究成果報告書 ソーシャルワークの評価方法と評価マニュアル作成に関する研究（第四報）』白澤政和他、2014年
- 2) 『厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業（身体・知的等障害分野）研究調査報告書 障害者のQOL評価に基づくケアマネジメント手法開発の研究』白澤政和他、2014年
- 3) 『介護支援専門員の資質向上と今後のあり方に関する調査研究』白澤政和他、2014年
- 4) 『地域包括支援センター・在宅介護支援センターのあり方について（提言）』白澤政和他、全国地域包括・在宅介護支援センター協議会、2014年
- 5) 『平成25年度老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）介護支援専門員のスーパービジョン実践としての実習型研修の構築に関する調査研究報告書』白澤政和他、一般社団法人日本ケアマネジメント学会、2014年
- 6) 『老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）福祉用具専門相談員の質の向上に向けた調査研究報告書』白澤政和他、一般社団法人全国福祉用具専門相談員協会、2014年
- 7) 『平成25年度社会福祉士振興・試験センター助成金事業 社会福祉士養成新カリキュラムの教育実態の把握と社会福祉士に必要な教育内容のあり方に関する研究事業報告書』白澤政和他、日本社会福祉士養成協協会、2014年

## 【学会発表】

- 1) 基調講演「社会福祉士養成課程改正の経緯と課題」白澤政和、『日本社会福祉教育学会誌 第8号』2012.8.25～26、日本社会福祉教育学会、pp.11～21、2013年
- 2) “An Exploratory Study on Time-Consuming Work and Psychological State of Senior Care Managers in Japan” Xiujuan Yu, Masakazu Shirasawa : 39th Association for Gerontology in Higher Education Annual Meeting & Educational Leadership Conference, Florida, USA, 2013.2.28～3.3, 2013
- 3) 教育講演「どうすれば地域包括ケアが進むか—地域包括支援センターとケアマネジャーの役割」白澤政和、『第17回日本在宅ケア学会学術集会 抄録集』2013.3.9～10、日本在宅ケア学会、pp.73～75、2013年
- 4) シンポジウム「人やその環境の強さ（ストレングス）を支えるケア」白澤政和、『日本認知症ケア学会誌 第14回日本認知症ケア学会大会プログラム・抄録集』2013.6.1～2、日本認知症ケア学会、pp.40、2013年

- 5) 「認知症高齢者ケアにおけるストレングス視点に基づく事例検討会の有効性（第一報）—認知症高齢者の状態変化とともに—」筒井沙耶・白澤政和他、『日本認知症ケア学会誌 第14回日本認知症ケア学会大会プログラム・抄録集』2013.6.1～2、日本認知症ケア学会、pp.149、2013年
- 6) 「認知症高齢者ケアにおけるストレングス視点に基づく事例検討会の有効性（第二報）—職員の意識と実践の変化とともに—」山田由美子・白澤政和他、『日本認知症ケア学会誌 第14回日本認知症ケア学会大会プログラム・抄録集』2013.6.1～2、日本認知症ケア学会、pp.150、2013年
- 7) 「有料老人ホームでの認知症の人に対する医療と介護の緊密な連携による症例研究—医療と介護との連携による認知症の人の状態の変化—」廣瀬栄子・白澤政和他、『日本認知症ケア学会誌 第14回日本認知症ケア学会大会プログラム・抄録集』2013.6.1～2、日本認知症ケア学会、pp.154、2013年
- 8) 大会長講演「ケアマネジメント—過去・現在・未来—」白澤政和、『日本ケアマネジメント学会第12回研究大会抄録集』2013.6.5～6、日本ケアマネジメント学会、pp.38～39、2013年
- 9) 「障害福祉領域のケアマネジメント効果評価に関する研究—介護保険利用者との比較から—」清水由香・白澤政和他、『日本ケアマネジメント学会第12回研究大会抄録集』2013.6.5～6、第28回日本老年学会総会、pp.77、2013年
- 10) 「ケアマネジメント実践による要介護者等の状況変化の分析—縦断的調査結果をもとに—」畑亮輔・白澤政和他、『日本ケアマネジメント学会第12回研究大会抄録集』2013.6.5～6、第28回日本老年学会総会、pp.79、2013年
- 11) 「障害者のQOLを高める構成要素について—相談支援専門員の実践に焦点をあてて—」橋本卓也・白澤政和他、『日本ケアマネジメント学会第12回研究大会抄録集』2013.6.5～6、日本ケアマネジメント学会、pp.104、2013年
- 12) 「相談支援専門員の実践がサービス利用者 に及ぼす効果の検証について」森地徹・白澤政和他、『日本ケアマネジメント学会第12回研究大会抄録集』2013.6.5～6、日本ケアマネジメント学会、pp.105、2013年
- 13) 「介護支援専門員のスーパービジョン実践としての実習型研修の経験と普及に向けた提案」吉江悟・白澤政和他、『日本ケアマネジメント学会第12回研究大会抄録集』2013.6.5～6、日本ケアマネジメント学会、pp.135、2013年
- 14) 「ケアマネジャーが捉える要介護高齢者等の状況変化の分析—縦断的調査結果をもとに—」米澤麻子・白澤政和他、『日本ケアマネジメント学会第12回研究大会抄録集』2013.6.5～6、日本ケアマネジメント学会、pp.161、2013年
- 15) 「ストレングス視点を取り入れた研修プログラムの効果—有料老人ホーム利用者の情報把握と活用への影響に焦点をあてて—」筒井沙耶・金原敬子・白澤政和、『日本ケアマネジメント学会第12回研究大会抄録集』2013.6.5～6、日本ケアマネジメント学会、pp.168、2013年
- 16) 「介護支援専門員の捉える利用者の在宅生活に対する自信とその関連要因—介護支援専門員

- に対するパネル調査の結果をもとに—」増田和高・白澤政和他、『日本ケアマネジメント学会第12回研究大会抄録集』2013.6.5～6、日本ケアマネジメント学会、pp.174、2013年
- 17) 「韓国におけるケアマネジメント利用者のエンパワメント過程—社会福祉士へのインタビュー調査から」 裴孝承・白澤政和他、『日本ケアマネジメント学会第12回研究大会抄録集』2013.6.5～6、日本ケアマネジメント学会、pp.179、2013年
- 18) 「東日本大震災における居宅介護支援事業所の後方支援の実態と課題—岩手県・宮城県調査での沿岸部と内陸部の比較をもとに—」岡田直人・白澤政和、『日本ケアマネジメント学会第12回研究大会抄録集』2013.6.5～6、日本ケアマネジメント学会、pp.193、2013年
- 19) 「日本の社会福祉サービスの未来と展望」白澤政和、2013 International Social Work・Welfare Forum of Korea, USA and Japan, 2013.6.26, Soul, Korea, 2013.
- 20) “User Attributes that influence the degradation of QOL of the elderly long-term care insurance users” K. Masuda, M. Shirasawa, R. Hata, S. Yoshie, H. Shiraki, K. Yamada, H. Takasuna, A. Yonezawa, K. Kishida, Y. Takase, K. Tanno, The 20th IAGG Congress of Gerontology and Geriatrics, June23～27, pp.674, Seoul, Korea, 2013
- 21) “Influence of dementia on changes of condition of the elderly who require everyday life assistance” R. Hata, M. Shirasawa, K. Masuda, S. Yoshie, H. Shiraki, K. Yamada, H. Takasuna, A. Yonezawa, K. Kishida, Y. Takase, K. Tanno, The 20th IAGG Congress of Gerontology and Geriatrics, June23～27, pp.676, Seoul, Korea, 2013
- 22) “A picture and problems of the confirmation of client’s safety by care managers following the Tunami disaster” N. Okada, M. Shirasawa, The 20th IAGG Congress of Gerontology and Geriatrics, June23～27, pp.839, Seoul, Korea, 2013
- 23) シンポジウム「人は何を支えに生き抜くのか～レジリアンスの視点から～ストレス視点での支援での気づきをもとに～」白澤政和、『日本医療社会福祉学会 第23回大会抄録集』2013.9.7～8、日本医療社会福祉学会、pp.12～13、2013年
- 24) 「相談支援事業における利用者のニーズ把握の実態に関する検証について—障害者ケアマネジメントの手法開発を通して—」森地徹・白澤政和他、日本社会福祉学会 第61回秋季大会報告要旨、2013.9.21～22、2013年
- 25) 「地域包括支援センターにおける成り立ちの違いと関連要因—地域包括支援センターの調査から—」白男川尚・白澤政和他、日本社会福祉学会 第61回秋季大会報告要旨、2013.9.21～22、2013年
- 26) 「地域包括支援センターの地域見守りと減災の一体的取組の可能性—東日本大震災被災地における支援の実態と課題から—」峯本佳世子・白澤政和他、日本社会福祉学会 第61回秋季大会報告要旨、2013.9.21～22、2013年
- 27) シンポジウム“社会福祉の開発と社会福祉教育” 「社会福祉教育に何が不足し、今何を研究・教育すべきか—コミュニティマネジメント研究の推進—」白澤政和、『2013年度全国社会福祉教育セミナー』2013.11.2～3、pp.61～64、2013年

- 28) 分科会シンポジウム「社会福祉士 国家資格のあり方について」白澤政和、『2013年度全国社会福祉教育セミナー』2013.11.2～3、pp.67～78、2013年
- 29) “The Influence of Dementia and Stroke on the Degree of Consensus Between Users and Case Managers in Grasping User’s Situation” Ryosuke Hata, Masakazu Shirasawa, Kazutaka Masuda, The Gerontological Society of America 66th Annual Scientific meeting, 2013.11.20–24, pp.88, 2013
- 30) “The Degree of Consensus Between Users and Case Managers in Grasping the User’s situation over Time” Masakazu Shirasawa, Ryosuke Hata, Satoru Yoshie, Kazutaka Masuda, Katsuko Tanno, Koji Kisida, Yoshimasa Takase, Keiko Yamada, The Gerontological Society of America 66th Annual Scientific meeting, 2013.11.20–24, pp.135, 2013
- 31) “Research on Relationships between the Nursing-Case Services and the User’s Situation during One-Year Case Management” Kazutaka Masuda, Masakazu Shirasawa, Ryosuke Hata, The Gerontological Society of America 66th Annual Scientific meeting, 2013.11.20–24, pp.135, 2013
- 32) パネルディスカッション「認知症高齢者の入院時・退院時支援の現状と課題について」白澤政和、第16回日本在宅医学会大会、2014.3.1～2、pp.180、2014年

#### 【その他】

- 1) 「障害者のQOL評価に基づくケアマネジメント手法開発の研究」白澤政和、『平成24年度厚生労働科学研究 障害者対策総合研究成果発表会 抄録集』公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会、pp.27～28、2013年
- 2) 基調講演「社会福祉士養成課程改正の経緯と課題」白澤政和、『日本社会福祉教育学会誌第8号』日本社会福祉教育学会、pp.11～21、2013年
- 3) シンポジウム「ボランティア活動の本質はなにか—災害ボランティアの活動から—」白澤政和、『第13回損保ジャパン記念財団賞受賞者記念講演録』損保ジャパン記念財団、pp.29～63、2013年
- 4) 「第一章 地域包括ケアの推進」白澤政和、『ソーシャルケア・マネジメントに関する総合研究』ソーシャルケアサービス従事者研究協議会、pp.8～22、2013年
- 5) 「介護保健制度での社会福祉士（ソーシャルワーカー）の役割」白澤政和、『第11回日韓こころの交流シンポジウム』2013.9.13、公益財団法人ユニバーサル財団、pp.85～98、ソウル、韓国、2013年
- 6) 「地域包括ケアにおけるケアマネジャーの役割」白澤政和、『ハンドトゥハート』Vol.74、pp.1、やさしい手、2013年
- 7) 「高齢社会を見直す—高齢者がいきいきと活躍できるために—」白澤政和、『YMCA 大阪青年』2013年10月号、pp.1、大阪YMCA編集室、2013年

- 8) 「地域包括ケアとケアマネジメント」白澤政和、『ケアマネジメント学』第12号、日本ケアマネジメント学会、pp.3～4、2013年
- 9) 連載「白澤教授のケアマネジメント快刀乱麻」白澤政和、『シルバー産業新聞』第48回「地域ケア会議と代表者会議の進め方4」第198号、第49回「地域ケア会議と代表者会議の進め方5」第199号、第50回「地域ケア会議と代表者会議の進め方6」第200号、第51回「地域ケア会議と代表者会議の進め方7」第201号、第52回「地域ケア会議と代表者会議の進め方8」第202号、第53回「地域ケア会議と代表者会議の進め方9」第203号、第54回「要支援者へのケアマネジメントの今後（前半）」第204号、第55回「要支援者へのケアマネジメントの今後（後半）」第205号、第56回「ケアマネジメントの有効性を考える1」第206号、2013年、第57回「ケアマネジメントの有効性を考える2」第207号、第58回「ケアマネジメントの有効性を考える3」第208号、2014年
- 10) 連載『ふれあいの輪』白澤政和・寺田勉「軽度者（要支援1・2）に対するケアプランづくり」168号、pp.12～16、白澤政和・宮間明子「定期巡回・随時対応サービスを利用したケアマネジメント」169号、pp.16～20、白澤政和・石井真由美「小規模多機能型居宅介護におけるターミナルケアのケアマネジメント」171号、pp.16～20、2013年
- 11) 『Dementia Support』連載「認知症の人を支援するケアマネジメント」白澤政和「「もの忘れ」の不安がある一人暮らしの人への支援」2013年1st、「小規模多機能型の利点を生かし、在宅の暮らしを日々支える」2013年2nd、「定期巡回・随時対応型訪問介護看護を利用することで、認知症が緩和」2013年3rd、エーザイ、2013年

#### 【科研費などの助成金】

- 1) 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究（A）「ソーシャルワークの評価方法と評価マニュアル作成に関する研究」（H22～25）（代表者）
- 2) 日本学術振興会 学術研究助成基金助成金 挑戦的萌芽研究「ケースマネジメントとコミュニティマネジメントの連結によるソーシャルワーク論の確立」（H25～27）（代表者）
- 3) 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（身体・知的等障害分野））「障害者のQOL評価に基づくケアマネジメント手法開発の研究」（H23～25）（代表者）

#### 【その他の研究活動】

- 1) 全国地域包括・在宅介護支援センター協議会調査特別委員会（委員長）
- 2) 厚生労働省平成25年度老人保健健康増進費等補助金事業（老人保健健康増進等事業分）「介護支援専門員のスーパービジョン実践としての実習型研修の構築に関する調査研究」（副委員長）
- 3) 厚生労働省平成25年度老人保健事業推進費等補助金事業（老人保健健康増進等事業分）「福祉用具専門相談員の質の向上に向けた調査研究事業」（副委員長、分科会委員長）
- 4) 三菱財団助成事業「災害ソーシャルワークの理論化と教材開発・教育方法の体系化に関する



研究」(委員長)

- 5) 平成25年度社会福祉士振興・試験センター助成金事業「社会福祉士養成新カリキュラムの教育実態の把握と社会福祉士に必要な教育内容のあり方に関する研究事業」(委員)

**【賞罰】**

- 1) 日本認知症ケア学会2013年度石崎賞受賞「有料老人ホームでの認知症の人に対する医療と介護の緊密な連携による症例研究—医療と介護との連携による認知症の人の状態の変化—」廣瀬栄子・白澤政和他、『日本認知症ケア学会誌 第14回日本認知症ケア学会大会プログラム・抄録集』2013.6.1～2、日本認知症ケア学会、pp.154、2013年

## 1. 研究課題

- (1) 透析患者の健康への震災の影響と震災への準備に関する研究
- (2) ライフコース中の経済的困窮の高齢期の健康に与える効果

## 2. 研究活動の概要

### (1) 透析患者の健康への震災の影響と震災への準備に関する研究

福島、宮城、岩手県の3県に在住の全国腎臓病協議会の会員全数に対し、郵送調査を実施し、2011年に発生した大震災の健康への評価と震災への事前準備に影響する要因を分析した。

### (2) ライフコース中の経済的困窮の高齢期の健康に与える効果

東京都健康長寿医療センター研究所との共同研究のデータを活用し、ライフコース中の経済的困窮の高齢期の健康に与える効果を解析した。

## 3. 研究業績

### 【論文】

- 1) 杉澤秀博、健康の社会的決定要因としての社会経済階層と社会関係に関する研究の接点、理論と方法、28 (1) , 53-68, 2103
- 2) 北井純子、杉澤秀博、有料老人ホームに居住する高齢者の精神的健康に与える社会的ネットワークの効果、老年学雑誌 掲載確定
- 3) 川内由加、杉澤秀博、ホワイトカラーのキャリアをもつ女性の定年後のキャリア選択：現役時代のキャリアの影響、老年学雑誌 掲載確定
- 4) 中辻萬治、荒居和子、杉澤秀博、他、1研究事例に基づく混合研究法の考察、老年学雑誌 掲載確定
- 5) 原田謙、杉澤秀博、都市度とパーソナル・ネットワーク——親族・隣人・友人関係のマルチレベル分析、社会学評論 掲載確定

**【科研費などの助成金】**

- 1) 科研費 新領域研究「社会連帯の形成・維持に関する研究」(代表)

**【その他の研究活動】**

- 1) 透析医会研究助成 透析患者の健康への震災の影響と震災への準備に関する研究



## 1. 研究課題

- (1) IT機器を活用した独居高齢者の生活支援方策の検討
- (2) 台湾蘭嶼島に居住する人々の生活様式と健康状態の関連

## 2. 研究活動の概要

### (1) IT 機器を活用した独居高齢者の生活支援方策の検討

【目的】 赤外線センサーでトイレ回数を把握するシステムを開発し、独居高齢者のトイレ回数の変動要因を明らかにすることを本年度の目的とした。

【方法】 70～91歳の独居高齢者6名の居宅のトイレに赤外線センサーを設置し、1分間毎の体動検知データをもとに4時間ごとのトイレ回数を算出した。体動検知間隔が10分未満は同じ回とした。トイレ回数を従属変数とし、測定月、測定曜日、測定時刻帯を独立変数とした一般線形モデルにて、トイレ回数に影響する、季節変動、週間変動、日内変動要因を検討した。

【結果および考察】 1日平均トイレ回数は8.8回でマットセンサなどを用いた先行研究の結果と近似していた。トイレ回数には有意な個人間変動、日内変動、季節変動がみられ、日内変動では、最も多い時刻帯は、6～10時および10～14時で、平均1.8回で、最も少ない時刻帯は、22～2時で平均1.1回であった。22～6時の夜間の平均トイレ回数は2.3回であり、夜間のトイレ回数の継続的モニタリングは、生活リズムの乱れや夜間頻尿などの問題の早期発見に役立つものと考えられた。季節変動では7月が有意に少なく、背景として脱水が考えられた。トイレ回数の継続的なモニタリングは高齢者の脱水状態を早期発見することにも役立つ可能性があるものと考えられた。

### (2) 台湾蘭嶼島に居住する人々の生活様式と健康状態の関連

【目的】 本研究は、これまで十分把握されていない蘭嶼島民の生活様式と健康状態の実態とその特徴を明らかにすることを目的に行った。

【方法】 2013年の1～3月に、島内の訪問看護師が機縁法により募った対象宅を訪問し、属性、職種、身長、体重、自覚症状、受療状況、既往歴、食品群別食品摂取頻度、飲酒・喫煙状況等について聞き取り調査を行った。

【結果および考察】 男性19名、女性33名、計52名（24～98歳）から回答を得た。独居は10%であった。職種は、男性では、無職が26%、専門・技術職、生産・労務職が各々11%、女性では、無職が36%、サービス業が24%と多かった。主な飲用水は、井戸水が42%、水道水が23%、ミネ

ラルウォーターが8%であった。毎食とっている食品では、スープ（42%）、米食（35%）が多くあげられた。また、つけものは8%が1日に2回とっていた。週6日以上食べている食品では、魚介類（30%）、淡色野菜（23%）、緑黄色野菜（18%）、肉類（13%）が多かった。喫煙者は男性35%、女性19%であった。その他ビンロウを嗜好する習慣がみられた。肥満（BMI $\geq$ 25）が、男性75%、女性59%と高率であった。自覚症状の頻度は、肩こり、腰痛（各々60%）、膝の痛み（37%）、疲れやすい（35%）、目のかすみ、足の痛み（各々33%）が多く、肥満度と有意な正の関連が認められた。自分を肥満とっていない肥満者が多く、肥満の認識と是正が重要な課題と考えられた。

### 3. 研究業績

#### 【著書】

- 1) 生活・福祉環境づくり21・日本応用老年学会編（編集委員長：柴田博，編集委員：渡辺修一郎，他）：ジェロントロジー入門。社会保険出版社，東京，2013年9月。
- 2) 渡辺修一郎：第2章2「老化」，第3章3「こころとからだのしくみと生活支援技術」。特定非営利活動法人ケアサポートらくらく編：介護職員初任者養成講座テキスト。日本医療企画，東京，2013年3月。

#### 【論文】

- 1) 兎澤恵子，渡辺修一郎：老人ホーム入居高齢者の唾液コルチゾールの日内変動と季節変動。日本老年医学会雑誌，50（6）：812-817，2013。
- 2) 稲葉康子，大淵修一，新井武志，柴喜崇，岡浩一郎，渡辺修一郎，木村憲，長澤弘：地域在宅高齢者に対する運動介入が1年後の運動行動に与える影響：ランダム化比較試験。日本老年医学会雑誌，50（6）：788-796，2013。
- 3) 新開省二，吉田裕人，藤原佳典，天野秀紀，深谷太郎，李相侖，渡辺直紀，渡辺修一郎，熊谷修，西真理子，村山浩史，谷口優，小宇佐陽子，大場宏美，清水由美子，野藤悠，岡部たづる，干川なつみ，土屋由美子：群馬県草津町における介護予防10年間の歩みと成果。日本公衆衛生雑誌，60（9）：596-605，2013。
- 4) 桜井良太，藤原佳典，安永正史，野中久美子，鈴木宏幸，大場宏美，深谷太郎，渡辺修一郎，新開省二：地域在住高齢者における運動機能に対する自信の有無による運動機能の差異転倒恐怖感との比較。日本老年医学会雑誌，50（3）：369-376，2013。
- 5) 亀井智子，藤原佳典，細井孝之，深谷太郎，野中久美子，小池高史，渡邊麗子，澤登久雄，松本真澄，渡辺修一郎，田中千晶：独居認知症高齢者へのSmart home利用の包括的アセスメント・評価枠組みの開発 文献レビューと介入研究事例の統合から。聖路加看護大学紀要，39：10-19，2013。

## 【学会発表】

- 1) 渡辺修一郎, 藤原佳典, 小池高史, 深谷太郎, 野中久美子, 長谷部雅美, 松本真澄, 二瓶美里: 赤外線人感センサーにより把握したトイレ回数の日内変動および季節変動. 第8回日本応用老年学会大会. 2013年11月9日
- 2) 山科典子, 芳賀博, 渡辺修一郎, 新野直明, 柴喜崇, 植木章三: 一般高齢者を対象とした介護予防事業利用意向に関連する要因の検討. 第8回日本応用老年学会大会. 2013年11月9日.
- 3) 渡辺修一郎: 台湾蘭嶼島に居住する人々の生活様式と健康状態の特徴. 第72回日本公衆衛生学会総会. 2013年10月25日.
- 4) 深谷太郎, 野中久美子, 小池高史, 長谷部雅美, 渡邊麗子, 田中千晶, 松本真澄, 植木章三, 吉田裕人, 荒山直子, 亀井智子, 渡辺修一郎, 藤原佳典: 赤外線センサーを用いた高齢者見守りシステムの検討. 第72回日本公衆衛生学会総会. 2013年10月25日.
- 5) 清野諭, 吉田裕人, 天野秀紀, 西真理子, 村上洋史, 谷口優, 野藤悠, 内田勇人, 熊谷修, 渡辺修一郎, 藤原佳典, 新開省二: 地域在住自立高齢者の体力基準値作成の試み－性・年齢階級別の検討－. 第72回日本公衆衛生学会総会. 2013年10月24日.
- 6) 松本直人, 新野直明, 長田久雄, 渡辺修一郎: 地域在住成人喘息患者における休息姿勢の選択傾向. 第72回日本公衆衛生学会総会. 2013年10月24日.
- 7) 佐藤美由紀, 山科典子, 安齋紗保理, 請井繁樹, 植木章三, 柴喜崇, 新野直明, 渡辺修一郎, 芳賀博: 地域包括ケアシステムにおける在宅医療体制と連携に対する課題と方策の検討. 第72回日本公衆衛生学会総会. 2013年10月23日
- 8) 松本直人, 齋藤弘樹, 新野直明, 長田久雄, 渡辺修一郎: 喘息児における休息姿勢の選択傾向. 第23回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会. 2013年10月11日.
- 9) 松本直人, 新野直明, 長田久雄, 渡辺修一郎: 肺気量指標による休息姿勢の比較検討. 第68回日本体力医学会大会, 2013年9月23日.
- 10) Kumiko NONAKA, Takashi KOIKE, Tarou FUKAYA, Masami HASEBE, Reiko WATANABE, Shuichiro WATANABE, Shouzoh UEKI, Naoko ARAYAMA, Hirohito YOSHIDA, Tomoko KAMEI, Masumi MATSUMOTO, Chiaki TANAKA, Takayuki HOSOI, Yoshinori FUJIWARA : In-home sensor devices and the elderly: the possibilities for meeting the needs and expectations of social workers. The 20th International Association of Gerontology and Geriatrics World Congress of Gerontology and Geriatrics. 2013. 6. 26.
- 11) Takuya UEDA, Yoshitaka SHIBA and Shuichiro WATANABE : Factors related to dropout from a voluntary exercise group are different among community-dwelling elderly of different age groups. The 20th International Association of Gerontology and Geriatrics World Congress of Gerontology and Geriatrics. 2013. 6. 26.
- 12) Masami HASEBE, Kumiko NONAKA, Takashi KOIKE, Tarou FUKAYA, Reiko WATANABE, Shouzoh UEKI, Hiroto YOSHIDA, Naoko ARAYAMA, Shuichiro Watanabe, Tomoko KAMEI, Masumi MATSUMOTO, Chiaki TANAKA, Takayuki HOSOI, and

Yoshinori FUJIWARA: Research regarding the use of elderly monitoring sensors as a support tool for those living alone: Attempt to develop a monthly report service for the community care centres. The 20th International Association of Gerontology and Geriatrics World Congress of Gerontology and Geriatrics. 2013. 6. 25.

- 13) Shuichiro WATANABE, Yoshinori FUJIWARA, Ryota SAKURAI, Masashi YASUNAGA, Taro FUKAYA and Shoji SHINKAI : Effects of 3-month exercise on blood pressure during exercise and bathing after the exercise. The 20th International Association of Gerontology and Geriatrics World Congress of Gerontology and Geriatrics. 2013. 6. 23.

#### **【科研費などの助成金】**

- 1) 厚生労働科学研究費補助金（H23－認知症－一般－001）：認知機能低下高齢者への自立支援機器を用いた地域包括的システムの開発と評価（分担研究者）
- 2) 日本学術振興会科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）：台湾離島に來襲した大津波の検証と低レベル放射線の生態系への影響（分担研究者）

#### **【その他の研究活動】**

- 1) 国土交通省の「健康・医療・福祉まちづくり研究会」委員として、健康・医療・福祉のまちづくりに関する研究に従事.
- 2) 世田谷区の健康きたざわプラン推進委員として健康きたざわプランの評価に関する研究に従事.
- 3) 東京都健康長寿医療センター研究所，社会参加と地域保健研究チーム協力研究員として，社会参加と地域保健に関する研究に従事.
- 4) 志木市介護保険事業計画策定委員会委員として志木市介護保険事業計画に関する調査研究に従事.

## 1. 研究課題

- (1) 高齢者と家族に関する研究
- (2) 一人暮らし高齢者とその支援に関する研究
- (3) 教育とその効果に関する研究【ジェンダー的視点から】

## 2. 研究活動の概要

### (1) 高齢者と家族に関する研究

このテーマのなかで、今年が高齢者の世帯構成の変化に焦点を当てている。日本では高齢者と子供との同居率が減少してきているが、これは1) 既婚の長男との同居という直系家族制度から子供全員と別居する核家族へという家族変動であるという説と、2) 子供の結婚時に一度別居しても高齢期に再度「途中同居」するように変化しただけで直系家族制度は健在であるという説がある。どちらの説が正しいかを検証したいと考え、東京都老人医療センター研究所【旧：東京都老人総合研究所】と東京大学・ミシガン大学が共同で行っているパネルデータで分析を始めている。また、近年は一人暮らし世帯の増加に特に注目しており、一人暮らし高齢者の特徴の把握、一人暮らし世帯の関連要因などをあきらかにしようと考えている。

### (2) 一人暮らし高齢者とその支援に関する研究

2010年後半に採択が決まった「ICTを活用した高齢者生活支援型コミュニティづくり」プロジェクト（代表者：小川晃子岩手県立大学教授 科学技術振興機構（JST）「コミュニティで創る新しい高齢社会デザイン」（4、助成金の1）参照）が2012年9月で終了した。これは過疎化している岩手県の中で4地域を選んで、一人暮らし高齢者の異変をICT（情報通信技術）を使って察知し、かつそれを生活支援にもつなげていく実験で、このような介入の前後での高齢者と地域社会の変化を把握しようという研究であった。直井はその中で「高齢者生活自立支援策グループ」のグループリーダーとして、これまでに行われた4回の高齢者調査の分析を報告書にまとめた。発行は来年。結果としてこのような介入だけではなかなか高齢者の孤立状況は改善されないが、冬期に家族とのコミュニケーション量をあげる効果が見られた。また共同で学会発表も行った（3、研究業績参照）。

### (3) 教育とその効果に関する研究

長年、教員養成系大学に在籍したところから、学校教育とジェンダーに関する研究にグループでとりくんできた。2010年度から科学研究費をとり、2012年2月から3月にかけていくつかの高校で調査を実施し、2013年に報告書を執筆した。直井は「高校卒業後の進路希望」についてジェンダー・高校タイプ別の分析を行なった。その後研究会を継続し、さらに高校生についての分析を進めるとともに、次に専門学校についての調査を行いたいと考え準備をしている。

## 3. 研究業績

### 【学会発表】

- 1) 千田睦美 小川晃子 山田幸恵 直井道子 黒澤美枝 「ICTを活用した見守りシステムと利用者の交流がもたらすもの」 日本老年行動科学会 第6回大会研究発表 2013

### 【報告書】

- 1) 東京学芸大学教員養成とジェンダー研究会『高校生男女の達成意欲における分極化と教師の支援のあり方に関する研究』 なかで6章の「高校生の将来像と進路意識」のうちの「6.1進路意識」を執筆 2013

### 【科研費などの助成金】

- 1) 科学技術振興機構（JST）社会技術研究開発センター（RISTEX）「コミュニティで創る新しい高齢社会デザイン」委託研究「ICTを活用した高齢者生活支援型コミュニティづくり」（代表：小川晃子岩手県立大学教授）（直井の役割：グループリーダー）9月まで
- 2) 科学研究費補助金「高齢者の健康・心理・社会的側面の横断的・縦断的变化におけるコホート差の研究」（代表：秋山弘子東京大学高齢総合研究機構教授 直井の役割 連携研究者）

### 【その他の研究活動】

- 1) 日本学術会議連携会員  
第22期の日本学術会議連携会員に選出された。社会変動と若者分科会、社会福祉分科会 高齢者の健康分科会 東日本大震災の被害構造と日本社会の再建の道を探る分科会の四つの分科会に所属し、活動している。
- 2) 学会活動：日本社会学会／日本老年社会科学会（評議員）／日本家族社会学会
- 3) 研究活動：老人医療センター研究所 協力研究員
- 4) 社会的活動：老人医療センター研究所倫理委員会委員／エイジング総合研究センター評議員／社会福祉法人（老人ホーム、デイサービスなど経営）真寿会理事・評議員／興亜福祉財団評議員／家計経済研究所 研究費助成審査委員会委員長
- 5) 講演：「地域におけるつながりとみまもりにむけて」 大田区と放送大学共催



## 1. 研究課題

高齢ボランティアリーダーによる自主活動を通じた新たな介護予防運動プログラムの提案とその普及と効果に関する研究

## 2. 研究活動の概要

### 【全体の概要】

本研究は、我々が従来から養成してきた高齢ボランティアリーダーを介して、地域特性を考慮した運動プログラム等を普及し、その介護予防に資する効果を検証しようとするものである。

### 【本年度の概要】

本研究では、中山間地の研究フィールドである宮城県T市の担当者と介入する地域高齢者リーダーと数回にわたる打ち合わせ会議を開催し、ゼミナール形式の勉強会の進め方、内容等について検討を行った。その結果、勉強会参加者の選出と、彼らが活動する介入地区と対照地区の選定作業を行った。

一方、首都圏の研究フィールドについては、当初予定していたZ市での実施が不可能となったため、急遽、他の自治体の協力を模索することになった。共同研究者（芳賀・柴）の尽力により、神奈川県A市より協力の承諾を得ることができ、A市の担当者との研究内容の打ち合わせを開始した。

その結果を踏まえ、両フィールドでの介入研究内容を打ち合わせ、それぞれの地域特性に応じた介入プログラムを策定した。また、介入効果の検証に使用するベースラインならびにフォローアップ調査に使用する調査項目を検討し、調査票を作成した。本研究課題については、2013年度笹川スポーツ研究助成ならびに日本学術振興会の科学研究費補助金（基盤研究B、平成25年度～28年度）に採択されたのを受けて、当初の調査対象者も両フィールドでそれぞれ2,000名程度に増やしてリストアップし、ベースライン調査に向けた準備作業を行った。

10月以降、ベースライン調査の実施に向けて両自治体側と調整をした結果、いずれも郵送調査を11月～12月に実施することになった。

T市の勉強会については、10月中に実施スケジュールを策定し、11月中に参加者への説明会を実施した。その結果、2014年1月から勉強会を実施した。しかし、首都圏（A市）では、調査についての調整にも時間を要し、最終的には個人情報保護の観点から無記名での調査で実施許可がおりた。調査実施、その後のデータ入力作業等が進んでおらず、2月中のベースライン調査分析が不可能となった。また、勉強会の実施時期についても、自治体側の都合により2013年度中の開始が困難となったため、2014年以降の勉強会実施に向けた計画策定のみを行った。

### 3. 研究業績

#### 【論文】

- 1) 片倉成子, 菅原美紀, 辻雅子, 犬塚剛, 植木章三, 鈴木道子: 内容と頻度の異なる栄養改善プログラムが地域高齢者の血清アルブミンに及ぼす影響. 応用老年学7 (1) : 42-50, 2013. (査読有)
- 2) 工藤剛実, 植木章三: 人工心肺操作時の精神的作業負荷の評価に関する研究—貯血レベルが精神的作業負荷に及ぼす影響—. 体外循環技術40 (4) : 478-486, 2013. (査読有)

#### 【学会発表】

- 1) Shigeeko KATAKURA, Miki SUGAWARA, Go INUZUKA, Shouzoh UEKI, Masako TSUJI, Michiko SUZUKI : EXAMINATION OF AN EFFECTIVE AND EFFICIENT HEALTH PROGRAM TO IMPROVE THE NUTRITIONAL STATUS OF COMMUNITY-DWELLING ELDERLY. The Journal of Nutrition, Health & Aging Volume 17, Supplement 1, 2013 : S662, 2013.
- 2) Shouzoh UEKI, Jinro TAKATO, Go INUZUKA, Naoko ARAYAMA, Hiroto YOSHIDA, Hiroshi HAGA : EFFECTS OF THE DEVELOPMENT OF VOLUNTARY ACTIVITIES AIMED AT THE POPULARIZATION OF A LOW-INTENSITY EXERCISE PROGRAM BY ELDERLY VOLUNTEERS ON AN AREA. The Journal of Nutrition, Health & Aging Volume 17, Supplement 1, 2013 : S662, 2013.
- 3) Masami HASEBE, Kumiko NONAKA, Takashi KOIKE, Tarou FUKAYA, Reiko WATANABE, Shouzoh UEKI, Hiroto YOSHIDA, Naoko ARAYAMA, Shuichiro WATANABE, Tomoko KAMEI, Masumi MATSUMOTO, Chiaki TANAKA, Takayuki HOSOI, Yoshinori FUJIWARA : REPORT SERVICE FOR THE COMMUNITY CARE CENTRES. The Journal of Nutrition, Health & Aging Volume 17, Supplement 1, 2013 : S728, 2013.
- 4) Saori ANZAI, Hiroshi HAGA, Haruhiko HONDA, Shouzoh UEKI : ASSOCIATION BETWEEN MUSCULOSKELETAL PAIN AND PHYSICAL FITNESS IN COMMUNITY-DWELLING ELDERLY. The Journal of Nutrition, Health & Aging Volume 17, Supplement 1, 2013 : S740, 2013.
- 5) Kumiko NONAKA, Takashi KOIKE, Tarou FUKAYA, Masami HASEBE, Reiko WATANABE, Shuichiro WATANABE, Shouzoh UEKI, Naoko ARAYAMA, Hihohito YOSHIDA, Tomoko KAMEI, Masumi MATSUMOTO, Chiaki TANAKA, Takayuki HOSOI, Yoshinori FUJIWARA : N-HOME SENSOR DEVICES AND THE ELDERLY : THE POSSIBILITIES FOR MEETING THE NEEDS AND EXPECTATIONS OF SOCIAL WORKERS. The Journal of Nutrition, Health & Aging Volume 17, Supplement 1, 2013 : S938, 2013.
- 6) Yuzuru SAKAMOTO, Koya SUZUKI, Kanzo OKAZAKI, Keiji SASAKI, Shouzoh UEKI : Physical activity, health-related quality of life and salivary biomarkers of adolescents in



- disaster area. 18th annual Congress of the European College of Sport Science - (Barcelona, Spain) , 2013.
- 7) 植木章三：アダプテッド・スポーツにおける“数字”に表れにくい”評価の大切さを考える～介護予防の分野から。日本体育学会第64回大会予稿集72-73, 2013.
  - 8) 岡崎勘造, 鈴木宏哉, 坂本譲, 植木章三：被災地の仮設住宅周辺の環境と児童・生徒の活動状況に関する分析。日本公衆衛生雑誌60 (10) : 364, 2013.
  - 9) 鈴木宏哉, 岡崎勘造, 坂本譲, 植木章三：沿岸部被災地の子どもにおける被災後2年間の身体活動量と健康関連QOL変化。日本公衆衛生雑誌60 (10) : 364, 2013.
  - 10) 坂本譲, 鈴木宏哉, 岡崎勘造, 植木章三：沿岸部被災地における児童・生徒の免疫ストレス関連指標の変化。日本公衆衛生雑誌60 (10) : 365, 2013.
  - 11) 犬塚剛, 植木章三, 高戸仁郎, 吉田裕人, 荒山直子, 本田春彦, 芳賀博：地域在住高齢者における食品摂取の多様性と生活機能との関連。日本公衆衛生雑誌60 (10) : 390, 2013.
  - 12) 植木章三, 高戸仁郎, 犬塚剛, 荒山直子, 本田春彦, 坂本譲, 吉田裕人, 芳賀博：農地や森林での活動を視野に入れた高齢者自主プログラムの提案と普及。日本公衆衛生雑誌60 (10) : 411, 2013.
  - 13) 石原美由紀, 星野千恵子, 清水小百合, 藤山友紀, 柵木聖也, 植木章三：介護予防二次事業における包括的な複合プログラム継続効果の検証。日本公衆衛生雑誌60 (10) : 411, 2013.
  - 14) 佐藤美由紀, 山科典子, 安齋紗保理, 請井繁樹, 植木章三, 柴喜崇, 新野直明, 渡辺修一郎, 芳賀博：地域包括ケアシステムにおける在宅医療体制と連携に対する課題と方策の検討。日本公衆衛生雑誌60 (10) : 428, 2013.
  - 15) 本田春彦, 河西敏幸, 植木章三, 高戸仁郎, 犬塚剛, 荒山直子, 入江由香子, 芳賀博：地域在住高齢者における包括的抑うつ予防プログラムの実践と評価（第二報）。日本公衆衛生雑誌60 (10) : 491, 2013.
  - 16) 深谷太郎, 野中久美子, 小池高史, 長谷部雅美, 渡邊麗子, 田中千晶, 松本眞澄, 植木章三, 吉田裕人, 荒山直子, 亀井智子, 渡辺修一郎, 藤原佳典：赤外線センサーを用いた高齢者見守りシステムの検討。日本公衆衛生雑誌60 (10) : 562, 2013.
  - 17) 植木章三, 伊藤秀一, 芳賀博, 一木誠：屋外型高齢者遊具の周知状況と利用状況からみた利活用の課題。第8回日本応用老年学会大会抄録集：25, 2013.
  - 18) 山科典子, 芳賀博, 渡辺修一郎, 新野直明, 柴喜崇, 植木章三：一般高齢者を対象とした介護予防事業利用意向に関連する要因の検討。第8回日本応用老年学会大会抄録集：28, 2013.
  - 19) 伊藤秀一, 植木章三, 芳賀博, 一木誠：屋外型高齢者遊具を利用した運動教室の開催と遊具利活用に関する課題。第34回医療体育研究会・第17回日本アダプテッド体育・スポーツ学会・第15回合同大会（仙台）抄録集：39, 2013.
  - 20) 吉田裕人, 植木章三, 高戸仁郎, 犬塚剛, 荒山直子, 芳賀博：地域高齢者の運動機能低下が将来の

#### 【その他】

- 1) 植木章三：自然を活かした運動プログラムを考える～農地や森林に目を向けた活動の提案.  
公衆衛生情報みやぎNo.422：9-12, 2013.
- 2) 矢部京之助, 植木章三：アダプテッド・スポーツについて. 月刊保団連2013年9月号：52-58,  
2013.

#### 【科研費などの助成金】

- 1) 日本学術振興会：平成25年～28年度科学研究費補助金（基盤研究B）（研究代表者：植木章三）
- 2) 笹川スポーツ財団：2013年度笹川スポーツ研究助成（研究者：植木章三）
- 3) 厚生労働省：平成25年度認知症対策総合研究事業（分担研究者：植木章三）

## 1. 研究課題

- (1) 配偶者との死別に関する研究
- (2) 虚弱高齢者を対象としたライフストーリーブック作成に関する介入研究

## 2. 研究活動の概要

### (1) 配偶者との死別に関する研究

ハビガースト (Havighurst, RJ) は、配偶者との死別から適応することが高齢期の発達課題の一つであると位置づけた。また配偶者との死別はストレスフルなライフイベントとして捉えられ、さらに生命リスクでもあることが明らかにされてきた。しかし悲しみを克服し、変わってしまった世界を再構築することは困難な課題であるために、何らかのサポートが必要である。

配偶者との死別を克服するためのサポートは、キリスト教の背景がある欧米先進諸国に倣い、我が国でも様々な活動が行われ、二〇数年を経てやっと定着してきた観がある。

配偶者との死別への対処という課題は文化を超えて普遍的な課題であり、欧米や日本だけでなく、近隣のアジア諸国においてもこの発達課題に対して、その対応が必要であることが予想される。アジアにおいても我が国と隣接し、しかも近代化と高齢化が進んでいる中国の都市部、上海と北京において、配偶者への死別サポートについての実態を調べ、さらにそのニーズに関して基礎的な研究を日中の研究者と共同で行い、知見を共有することを目指してきた。

昨年までは上海を本年度は北京を拠点に活動を行っている。北京では高齢者を対象にホットラインを運営する2つの民間のボランティア団体を訪問し、その活動についてヒアリングする機会を得た。そのうちの一つの団体は地域に在住する配偶者と死別した一人暮らしの高齢者女性を対象に毎月一度会合を開催し、お茶を飲みながら生活上の悩み等について語り合い、慰め合っていた。年長の高齢女性と比較的若い高齢女性でペアとなり、病気などの時にお互いに看病したりして支え合っていた。

死別体験者へのヒアリングを通して死や死別についてのトピックスがタブーとして受け止められており、グリーフケアへの抵抗感も少なくないようであった。また一人っ子政策によって形成された社会的背景が日中の死別高齢者の違いを反映している点についても興味深い。死別ケアについてのニーズ調査は次年度以降に行う予定である。

## (2) 虚弱高齢者を対象としたライフストーリーブック作成に関する介入研究

本研究は、虚弱な高齢者の生活の質を維持、向上するために有効なプログラムを開発することを目的に、特養入所の高齢者を傾聴ボランティアが訪問するプログラムとライフストーリーブックを作成するプログラムを実施し、その効果を比較した。いずれも週に一度、6回連続してプログラムを提供し、その前後に効果評定を実施した。

傾聴プログラムでは、耳を傾けて話を聞いてくれるボランティアの存在は、訪問を楽しみにしていた参加者にとって幸福感を高める方向へと導いたように思われた。しかしながら対人的関わりや自己開示を積極的に求めない場合や身体的に不安がある場合には傾聴ボランティアの訪問を必ずしも歓迎しておらず、その効果も示されなかった。一方、ライフストーリープログラムでは、自尊感情と主観的幸福感が共に上昇し、かなり効果のあるプログラムであることが明らかになった。

## 3. 研究業績

### 【著書】

- 1) 河合千恵子監修 70歳を過ぎた親がひとりになったら―「その日」のためにあなたが知っておくべきこと 河出書房新社 (2014)

### 【論文】

- 1) 河合千恵子・新名正弥・高橋龍太郎 虚弱な高齢者を対象とした心理的QOL向上のためのライフレビューとライフストーリーブック作成プログラムの効果 老年社会科学 35 (1) 39-48 (2013)

## 1. 研究課題

- (1) 地域解放型共同住宅の実現にむけて：荻窪家族プロジェクト
- (2) 後期高齢期の社会活動継続と ICT（情報通信機器）

## 2. 研究活動の概要

### (1) 地域解放型共同住宅の実現にむけて：荻窪家族プロジェクト

荻窪家族プロジェクトとは、高齢者向けの施設にありがちな地域社会からの閉鎖性、高齢者のみが集住することへの課題意識などから、地域や住人の交流を目的としたコモンスペースをふんだんに配した新たな住まい方、単身者向け住宅を創り上げることを目的としたプロジェクトである。ここに、社会老年学の専門家として関わるなかで、入居者と地域住民との新たなコミュニティづくりに向けた社会実験を行っている。

本年度は、このプロジェクトに関心をもつ地域住民や専門家と共に、ワークショップを月1回開催（写真左）し、住宅の運営やコモンスペースの活用について意見交換を行っている。次年度は、徐々に入居希望者も巻き込む形で、このワークショップを継続していく。

### (2) 後期高齢期における社会活動継続と ICT

電子メールや携帯電話などを交流媒体として活用してきた高齢者が、縮小期にある後期高齢期において、それらのツールをどう利活用していくかを明らかにしていく。

本年度は、企業退職者会が立ち上げたfacebook勉強会において社会実験を行っている（写真右）。この勉強会は、加齢に応じて直接的な会の活動への関与が困難になるなかで、それを補完する手段としてfacebookを活用することを目的に設立された。現在は14名のコアメンバーがfacebook上でクローズドなコミュニティをつくり、交流を行っている。次年度は、企業退職社会全体に広げていく予定であり、会から足が遠のきつつある後期高齢期の会員に対する可能性を検討していく。



### 3. 研究業績

#### 【学会発表】

- 1) 澤岡詩野・袖井孝子・森やす子・荒井浩道・鈴木昭男：高齢者の電子メールを介した非親族との日常的交流；中高年向けWEBサイト登録者を対象として，第55回日本老年社会科学大会（2013/06）
- 2) 荒井浩道・袖井孝子・澤岡詩野・森やす子・鈴木昭男：ICTを活用した高齢孤立防止モデルに対する評価の推移；テキストマイニングによるインタビューデータの時系列分析，第54回日本老年社会科学大会（2013/06）

#### 【科研費などの助成金】

- 1) 平成23年度文部省科学研究費補助金 若手A（平成23～25年 課題番号23683009）：日常化しつつある都市在宅高齢者の交流媒体としてのインターネットの役割

#### 【その他の研究活動】

- 1) 瑠璃川正子・連健夫・澤岡詩野：地域と交わり合いながら住まう共同住宅「荻窪家族プロジェクト」，比較住宅政策研究会（2013/08）
- 2) 澤岡詩野：地域開放型の共同住宅「荻窪家族プロジェクト」；多様な主体の参加による新たな住まい方の実現にむけて，建築百人展2013（2013/11）

## 1. 研究課題

高専賃居住者に対するエンパワーメントを高める取り組みが共助活性化に与える効果

## 2. 研究活動の概要

### 【研究業績】

査読ある英語論文1編及び査読有る日本語論文3編を執筆した

### 【社会貢献活動】

- 1) かながわ高齢者保健福祉計画評価・推進等委員会の委員としてかながわ県の介護予防事業の推進に従事した。
- 2) かながわ高齢者保健福祉計画評価・推進等委員会介護予防事業ワーキング部会長（座長）として介護予防事業の施策立案に従事した。
- 3) 相模原市高齢者保険福祉推進会議の委員として高齢者保険福祉計画作成に従事した。
- 4) 神奈川県座間市においては、一次予防事業としての介護予防サポーター育成に加え、二次予防事業全般にわたり計画・運営に関わった。

## 3. 研究業績

### 【論文】

- 1) Chika Kuwabara, Yoshitaka Shiba, Miki Sakamoto, Haruhiko Sato : The Relationship between the Movement Patterns of Rising from a Supine Position to an Erect Stance and Physical Functions in Healthy Children. *Advances in Physical Education* 3 (2) 92-97, 2013
- 2) 新井智之, 柴喜崇, 栗原慶太, 柴田博 : 脳血管障害者の転倒と歩行変動との関連. *総合リハビリテーション* 41 (3) 269-274, 2013
- 3) 新井武士, 大淵修一, 小島成実, 柴喜崇, 河合恒, 大室和也 : 虚弱高齢者の膝関節伸展角速度測定地と身体機能との関係 - 等尺性膝関節伸展筋力との比較 -. *理学療法科学* 28 (3) : 317-322, 2013
- 4) 稲葉康子, 大淵修一, 新井武士, 柴喜崇, 岡浩一郎, 渡辺修一郎, 木村憲, 長澤弘 : 地域在住高齢者に対する運動介入が1年後の運動行動に与える影響 : ランダム化比較試験. *日本老年医学会雑誌* 50 (6) : 788-796, 2013



## 【学会発表】

- 1) Akie Kawamura, Naoto Kamide, Yoshitaka Shiba, Noriko Yamashina, Chihiro Yamagata : “Aging in place” has a positive effect on housebound status in well-functioning elderly. The 20th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics June 23–27, Coex, Seoul, Korea, 2013
- 2) Kosuke Mizuno, Yoshitaka Shiba, Noriaki Ikeda, Haruhiko Sato, Naoto Kamide, Yoshikazu Suzuki, Michinari Fukuda, Akihiro Takeuchi : The kinematic analysis of trunk and pelvis movement during walking using a smartphone-Comparison of community-dwelling elderly women and healthy young women-. The 20th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics June 23–27, Coex, Seoul, Korea, 2013
- 3) Naoto Kamide, Noriko Yamashina, Akie Kawamura, Yoshitaka Shiba : Depression in Japanese elderly people with lowincome was influenced from social support and habitual exercise. The 20th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics June 23–27, Coex, Seoul, Korea, 2013
- 4) Noriko Yamashina, Naoto Kamide, Akie Kawamura, Yoshitaka Shiba, Hiroshi Haga : What kinds of factors make it possible that Japanese elderly people living in public apartments know the location of the shelter in disasters?. The 20th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics June 23–27, Coex, Seoul, Korea, 2013
- 5) Takuya Ueda, Yoshitaka Shiba, Shuichiro Watanabe : Factors related to dropout from a voluntary exercise group are different among community-dwelling elderly of different age groups. The 20th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics June 23–27, Coex, Seoul, Korea, 2013
- 6) Yoshitaka Shiba, Saori Anzai, Hiroshi Haga : Social activity of Japanese elderly is associated with paid work activity and favorable physical functioning-related QOL. The 20th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics June 23–27, Coex, Seoul, Korea, 2013
- 7) 安齋紗保理, 柴喜崇, 芳賀博 : 介護予防事業後の運動習慣の獲得に対する取組み ～自己効力感向上プログラムの開発～. 第72回日本公衆衛生学会総会 10.24 (津) , 2013
- 8) 佐々直紀, 柴喜崇, 安齋紗保理, 嘉治一樹, 上出直人, 小比田協子 : 日常生活上の目標達成を意識させた介護予防運動教室の効果 – 目標管理シートを用いた電話支援 –. 第8回日本応用老年学会大会 11.9. (札幌医科大学臨床大講堂) , 2013
- 9) 佐藤美由紀, 山科典子, 安齋紗保理, 飯田晃, 植木章三, 諸井繁樹, 柴喜崇, 館石宗隆, 新野直明, 渡辺修一郎, 芳賀博 : 地域包括ケアシステムにおける在宅医療体制と連携に対する課題と方策の検討. 第72回日本公衆衛生学会総会 10.23 (津) , 2013
- 10) 山縣知紘, 柴喜崇, 上出直人, 山科典子, 河村晃依 : 高次生活機能の高い高齢者における「閉じこもり」に関連する心理的・社会的要因の検討. 第48回日本理学療法学会大会 (名古屋) , 2013



- 11) 植田拓也, 柴喜崇, 吉川早織, 渡辺修一郎：地域在住高齢者における自主参加型体操グループへの参加中止に関連する要因と要因の経年変化 -3年間の縦断調査-。第48回日本理学療法学会大会（名古屋）, 2013
- 12) 柴喜崇, 河村晃衣, 上出直人, 村山憲男, 佐藤春彦, 大淵修一：サービス付き住宅におけるエンパワメントを高める取り組みが認知機能に与える効果 異なる2つの方略における短期効果の比較。第55回日本老年社会科学大会 p182 6.4-6.6.（大阪国際会議場）, 2013
- 13) 山科典子, 芳賀博, 渡辺修一郎, 新野直明, 柴喜崇, 植木章三：一般高齢者を対象とした介護予防事業利用意向に関連する要因の検討。第8回日本応用老年学会大会 11.9.（札幌医科大学臨床大講堂）, 2013

#### 【その他—公開講座】

- 1) 柴喜崇：公開講座 「元気で長生きを応援！—体操でロコモ予防！—」。地域サポーター養成講座 10.8.（鎌倉市福祉センター 2階 第1・2会議室）鎌倉市長 松尾 崇, 2013
- 2) 柴喜崇：平成25年度介護予防従事者研修会「運動器の機能向上プログラム」。神奈川県保健福祉局福祉部高齢社会課長 小島 誉寿 10.3.（神奈川県民ホール 大会議場）, 2013
- 3) 柴喜崇：無病息災は本当に健康なの？ あなたの健康のチェックリスト。やまと市民大学講座 大和市長 大木哲 1.26（大和生涯学習センター）, 2013
- 4) 柴喜崇：「介護予防の事業評価の考え方」。平成24年度 介護予防事業の事業評価に関する勉強会 千葉県 健康福祉部保健指導課長 神部真一 1.21（千葉市）, 2013
- 5) 柴喜崇：公開セミナー「パーキンソン病の治療と理学療法」。公益社団法人神奈川県理学療法士会 会長 秋田裕 かながわ労働プラザ 8.11., 2013
- 6) 柴喜崇：笑涯活動⑦ 身体づくり—生き生き筋肉づくり—。平成25年度星が丘すずかけ学級（相模原市立星ヶ丘公民館）館長 奥山 憲雄 11.7., 2013

#### 【科研費などの助成金】

- 1) 柴喜崇（研究代表者）：高専賃居住者に対するエンパワメントを高める取り組みが共助活性化に与える効果 平成23年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金 基盤研究（C））, 2011-
- 2) 柴喜崇（分担研究者）, 植木章三（研究代表者）：地域高齢者を学生に見立てたゼミナールによる新たな介護予防プログラムの提案。平成23年度-28年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金 基盤研究（B））, 2013-

## 1. 研究課題

- (1) 日系米国人としての経験が、生き方や考え方、エンド・オブ・ライフの捉え方に与える影響についての研究
- (2) 生殖医療の新たな枠組み構築～非配偶者間人工授精における告知と出自を知る権利に関する研究

## 2. 研究活動の概要

### (1) 日系米国人としての経験が、生き方や考え方、エンド・オブ・ライフの捉え方に与える影響についての研究

本年度から早稲田大学の「高齢者主体の新しいアドバンス・ケア・プランニングの創出—市民の連帯と共助をめざして」という研究プロジェクトに参加させてもらっている。それと関連して、米国に暮らす日系人高齢者が、日本とアメリカの文化をあわせ持つ環境の中で年齢を重ね、それがどのように彼らの生き方や考え方、エンド・オブ・ライフの捉え方にも影響しているかをさぐるために、昨年度に引き続き、今年度も日系アメリカ人の高齢者にインタビュー調査を実施してきた。

昨年までは、週に1度、ボランティア活動をしてきたYu-Ai-KaiのSenior Day Care Serviceに訪れる高齢者を対象にしていたが、今年度は、米国カリフォルニア州、サンノゼ市にあるジャパントウンの日系人のための施設、Ishizue, Akiyama Wellness Center等を利用する高齢者や、その関係者にも対象者の範囲をひろげた。彼らの多くは日系二世であり、二世の多くは現在80歳代後半から90歳代である。彼らの中には第二次世界大戦中に日本人強制収容所に入った経験を持っていたり、戦中、親の意向で日本に送られ、日本語の壁や日米の文化の違いに苦勞し、日本になじめず戦後になって米国にもどってきたという人も少なくない。また、戦後になって新たなチャンスを求め、自らの意志で米国に移住してきたという高齢者もいる。

彼らの語りの中から、米国に暮らす日系高齢者の生き方、考え方やエンド・オブ・ライフの捉え方への影響をさぐった。他のプロジェクトのメンバーは日本の状況について研究を行っているので、将来的には日米を比較ができればと考える。

## (2) 生殖医療の新たな枠組み構築～非配偶者間人工授精における告知と出自を知る権利に関する研究

日本でも、2012年頃から第三者のかかわる生殖医療に関する法の必要性に注目が集まり、2013年暮れから、法案づくりに向けた動きが活発化しつつある。法に生まれた子のドナーの情報を得る権利を盛り込むかどうか懸案のひとつとなっており、法案づくりに先駆け、海外の提供精子をつかった生殖補助医療で生まれた人の「出自を知る権利」の状況について調査してきた。本年度は、6月ロンドンで開かれた欧州生殖学会（ESHRE）に参加し、欧州の研究者たちとの情報交換をおこなった。また英国のUK DonorLinkのナショナルアドバイザーだったDr. Marilyn Crawshawの元を訪れ、英国でのこれまでの生まれた人の「出自を知る権利」を尊重する動きについての情報提供を受けた。また9月にはオランダで、やはり国から助成を受け、ドナーや遺伝的きょうだい探しを行っているFiomや、オランダの健康・厚生・スポーツ省、またドナーと生まれた人や、同じドナーから生まれた生物学的きょうだいの鑑定などを国の指定を受けて行っているDNA鑑定ラボを訪れ、責任者たちから、ドナーリングをめぐる現状や課題について情報提供してもらった。現在はそれらを踏まえながら、日本の生殖医療の新たな枠組みについて検討をすすめているところである。

## 3. 研究業績

### 【著書】

- 1) DVD『終わりのない命の物語 7つのケースで考える生命倫理』全7巻、赤林朗、手島恵総監修、鶴若麻理、佐藤雅彦、仙波由加里監修、丸善出版社。
- 2) 仙波由加里「提供精子・提供卵子で生まれた人たちの出自を知る権利とドナーリング」、『グローバル化時代における生殖技術と家族形成』、日比野由里編著、161-179頁、日本評論社。
- 3) 仙波由加里「ドナーおよび遺伝的きょうだい探しを支援するための取り組み—オランダのドナーリングシステム」『精子・卵子・胚の提供をともなう生殖医療と家族』、7-16頁、日比野由里編集・発行、内閣府最先端・次世代研究開発支援プログラム「グローバル化による生殖技術の市場化と生殖ツーリズム：倫理的・法的・社会的問題」。
- 4) 仙波由加里翻訳、絵本『お母さんとお父さんとドナーの3人がいて生まれてくる赤ちゃんのお話』（原題：“Sometimes it takes three to make a baby, Explaining egg donor conception to young children”, Kate Bourne著, Melbourne IVF,2002）、清水清美編集・発行、2013年度文部科学省科学研究費助成金（基盤研究B）、研究課題「卵子提供」を検討しているカップルへの情報提供に関する研究（24390500）の情報提供資料として作成。

## 【論文】

- 1) 久慈直昭、仙波由加里「生殖医療の新たな枠組み構築～非配偶者間人工授精における告知と出自を知る権利に関する研究」『厚生労働科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）分担研究報告書』。

## 【その他の研究活動】

- 1) 日系米国人2世の経験を記録するプロジェクトに参加中。映像および出発物に、まとめる予定。
- 2) 2014年5月17日（土）の桜美林大学大学院老年学研究科主催、公開講座の準備。
- 3) 2013年7月、英国ロンドンで開催された欧州生殖学会（ESHRE）にて、情報収集、および他国の研究者たちとの情報交換。
- 4) 2013年9月、オランダにて、オランダのドナーリンク関連各所を訪問し、情報収集。
- 5) 日本生命倫理学会雑誌『生命倫理』に「DI出生者とドナーの情報自主登録制とドナーリンクーオランダFiomの活動を参考にー」を投稿中。

## 1. 研究課題

- (1) 幼児の高齢者観に世代間交流プログラムが及ぼす影響に関する研究
- (2) 社会的に孤立しがちなひとり暮らし高齢者等へのコミュニティソーシャルワークによる支援のあり方について
- (3) 触法高齢者・障害者の地域生活定着促進のための効果的支援方法の開発事業

## 2. 研究活動の概要

### (1) 幼児の高齢者観に世代間交流プログラムが及ぼす影響に関する研究

王姿月（東海大学大学院、H24修士修了）が修士論文研究として行った、意図的な世代間交流プログラムが幼児の高齢者観にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とした研究の調査データを用いて、再分析（形態素分析等の質的分析）を共同で行った。

この研究は、幼稚園・保育園の年長児（4-5歳児）で「交流している園児」と「交流していない園児」を対象に個別面接調査を行ったものである。我が国では、幼児に高齢者観や高齢者に対する態度を、直接、尋ねた研究はなく、貴重なデータである。論文にまとめて、学会誌又は紀要に投稿する予定である。

### (2) 社会的に孤立しがちなひとり暮らし高齢者等へのコミュニティソーシャルワークによる支援のあり方について

日本生命財団の研究助成を受けて行っている研究の一環として、コミュニティソーシャルワーカー（CSW）を対象に、活動の実態、孤立支援の状況、CSWの課題等を明らかにするための郵送調査（8月～9月）を行った。有効回収票408票（回収率38%）について分析を行い、報告書にまとめた（印刷は来年度）。この結果の一部を日本地域福祉学会の大会（H26年6月）に報告する予定である。さらに3月中にCSWによる孤立支援の効果を明らかにするためのフォーカスグループインタビューを2か所（豊島区と飯能市）で4グループに対して実施する計画である。

### (3) 触法高齢者・障害者の地域生活定着促進のための効果的支援方法の開発事業

社会福祉法人 社会福祉事業研究開発基金（三井信託銀行）のH26年度助成金を得ることができた。昨年11月に決定通知をいただいたので、研究会を立ち上げて、文献の収集・読み合わせを始めた。刑務所を出所しても再犯を繰り返す高齢者や障害者の地域生活定着を支援するために、H21年度に「地域生活定着促進事業」（厚生労働省）が創設され、各都道府県に「地域生活定着支援セン

ター」が整備された。センター事業の実態を事例研究と全国調査を行って明らかにする。3月下旬に、最初に設置した山口県社会福祉協議会によるセンターに対し、ヒアリング調査を行うことになっている。

### 3. 研究業績

#### 【著書】

- 1) 直井道子・中野いく子・和気純子編『高齢者福祉の世界』（改訂版）、有斐閣、2014年3月

#### 【論文】

- 1) 中野いく子「2012年度学界回顧と展望；高齢者福祉部門」社会福祉学第54巻第3号、2013、pp.155-164

#### 【助成金】

- 1) 公益財団法人 日本生命財団 平成25年度 高齢社会 実践的研究助成「社会的に孤立しがちなひとり暮らし高齢者等へのコミュニティソーシャルワークによる支援のあり方について」（分担研究者）（H25年度123万円、H24年度127万円）

#### 【その他の研究活動】

- 1) 東日本大震災被災者支援福祉専門職インタビュー調査（委託研究）  
被災者支援における福祉と医療の連携、とくに精神医療との連携の実態について明らかにし、今後の生活支援と精神支援の統合のあり方を探求する研究として、宮城県において、①福祉避難所で支援を行った社会福祉士、②子どもの学習支援を行っているTEDICの代表者、③復興担い手育成や子育てママ応援、子ども・若者育成支援、コミュニティ再生などの事業を行っている「石巻復興支援ネットワーク（やっぺす）」の代表者にインタビューを行った。

## 1. 研究課題

高齢者のうつ予防のためのポピュレーションアプローチの実証研究

## 2. 研究活動の概要

高齢期はうつ病になりやすい要因が増える時期であり、うつ病は自殺と関係する病気として高齢期の最も重要な精神健康問題である。しかし、予防重視型介護予防施策では、うつリスクのある高齢者に対する対策が遅れている。本研究は、地域高齢者を対象としたうつ予防・支援のため、応用可能な新たなポピュレーションアプローチ方法を提供することを目的とする。ポジティブ心理学的アプローチを主なツールとしたうつ予防プログラムの有効性について、抑うつ状態およびその他のメンタル面に及ぼす短期、中長期的な影響について検討する。

学会等の活動について本年度はIAGG (The 20th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics) において、本件研究の成果をシンポジウム形式で「Prevention of Late-Life Depressive Symptoms」をテーマに発表した。また、IPPA (The Third World Congress on Positive Psychology) では2演題の発表を行った。

結果の概要：うつ予防プログラムを都市部、地方自治体両地域で実施した。本プログラムを実施することにより、高齢者のうつ状態、不眠、不安の改善が明らかになり、さらに幸福感の向上が見られた。また、1年後の追跡期間中にその効果は維持されていることが明らかになった。高齢者のうつ予防プログラムが地方自治体においてもその有効性示された。よって、一次予防、二次予防対象者向けのプログラムとして妥当であることが示された。

以上の研究活動により、高齢者向けうつ予防プログラムの確立に向け、学術的な評価を行い、さらに学術誌に投稿する準備を進めている段階である。

2013年度の研究実施状況は、東京都のF市と新潟県のN市の2自治体においてポピュレーション版うつ予防教室を3教室とハイリスク版のうつ予防教室11教室合計14教室実施した。2014年度は自治体を増やして、実証研究を継続する。

普及啓発活動として、高齢者向けの講演会2回、専門家向けシンポジウム1回、研修会を3回、対象者向け結果報告会6回、自主グループの合同会2回実施した。



### 3. 研究業績

#### 【学会発表】

- 1) シンポジウム：Cross-cultural Comparative Studies on the Effectiveness of Positive Psychology Approach in Preventing Late-Life Depression Among Older Adults Residing in Japan and Korea. Jin Yu：Prevention of Late-Life Depressive Symptoms. 20th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics, June 2013. Seoul, Korea.
- 2) 兪今：高齢者のうつ状態の変化及びリスク要因. 第28回日本老年精神医学会；大坂2013
- 3) 安順姫、兪今、兪峰、崔範日：中国東北農村地域における高齢者の社会参加と健康関連要因に関する縦断的研究. 第55回老年社会科学大会；大坂2013
- 4) Jin Yu, Naoakira Niino, Feng Yu, Ayako Morita, Shunji An, Hiroshi Haga：Medium-to long-term effectiveness of positive psychology approach in preventing depressive symptoms of the community elderly. Third World Congress on Positive Psychology June, 2013. Los Angeles California U.S.A.
- 5) Ayako Morita, Jin Yu, Feng Yu, Shunji An, Factors associated with well-being of Japanese frail older adults and effectiveness of group positive psychology intervention. Third World Congress on Positive Psychology June, 2013. Los Angeles California U.S.A.
- 6) 兪今、安順姫、兪峰、方今女：高齢者のうつ状態の持続及び発症に寄与するリスク要因. 第78回日本民族衛生学会；佐賀2013
- 7) 安順姫、兪今、兪峰、方今女：高齢者の心理的幸福感に影響する健康要因－中国東北農村地域を対象とした縦断的研究－. 第78回日本民族衛生学会；佐賀2013

#### 【科研費などの助成金】

- 1) 高齢者のうつ予防のためのポピュレーションアプローチの実証研究（文部科研・代表）

#### 【その他の研究活動】（シンポジウム・報告書・発行物）

- 1) ダイヤ財団専門家向けシンポジウム：高齢期のうつ予防事業について－「ハッピープログラム」の取り組み. 2013
- 2) 兪今：平成24年度府中市介護予防事業「ハッピー教室」実施報告書（2013. 12）
- 3) 兪今：平成24年度府中市介護予防事業「うつ予防教室」の事業評価報告書（2013. 12）
- 4) 兪今：平成22年度～平成24年度「高齢者の健康と日常生活に関する実態調査」結果報告書（2014. 03）
- 5) 兪今：平成24年度長岡市介護予防事業「ハッピー教室」実施報告書（2014. 03）
- 6) 兪今：「高齢期の心の健康づくり」ダイヤニュース, No73；P10－12；2013
- 7) 兪今：「うつ予防のためのポピュレーション・アプローチ・プログラムの応用と効果」. ダイヤニュース, No74；P3－6；2013（論説）
- 8) 兪今、安順姫：「中国農村地域における高齢者の健康度の実態」. ダイヤニュース, No76；P10－12；2014
- 9) 兪今：日々のリトルハッピーを感じ、幸せをグレードアップ－小さな心掛けが健康を守り、幸せを作る－. 生活福祉研究, No86；P21－38；2014



## 1. 研究課題

- (1) 引退への移行期の雇用環境の変化と勤労者の適応過程
- (2) 「日本的雇用制度」崩壊の時代のシニアライフ
- (3) ファイナンシャルプランから見たシニアライフ

## 2. 研究活動の概要

### (1) 「シニアライフ研究会」

桜美林大学大学院老年学修士コースの終了後、指導教官の長田久雄教授のもとで自主的な勉強会を立ち上げる。「シニアライフ研究会」と名付け、高齢社会の中で働いていくシニアライフの課題を研究対象とする。個人と企業双方の視点から、産学協力する形をめざして活動している。

### (2) NPO 法人に参加して高齢者問題を研究

ファイナンシャル・プランナーで作る、NPO法人「くらしとお金の学校」の事務局メンバーとして、介護や認知症対策など高齢者の実際の課題を研究するため、セミナーなどを主催している。認知症の最新情報について、セミナー講師も務める。

### (3) ファイナンシャル・プランナー事務所立ち上げ

高齢者の課題を専門とするファイナンシャル・プランナーとして事務所を立ち上げる。引退への移行期から高齢期まで、シニアライフの過ごし方について、老年学の研究者、かつファイナンシャル・プランナーとしての視点からアドバイスや発信をできるよう活動する。

### (4) 学会活動

- ・2013年6月、韓国ソウルで開かれた「国際老年学大会」参加。
- ・「老年社会科学会」に加入。

## 3. 研究業績

上記、各活動に専念。

## 1. 研究課題

- (1) 地域在住高齢者における自主参加型体操グループへの参加中止に関連する要因
- (2) 自主参加型体操グループへ参加している地域在住高齢者における腰痛・膝痛の有無と運動機能および精神的健康の関係

## 2. 研究活動の概要

### (1) 地域在住高齢者における自主参加型体操グループへの参加中止に関連する要因

本研究では、自主参加型体操グループに継続的に参加している地域在住高齢者において、①男女別、②年齢区分別、③追跡年数別において、体操グループへの参加中止に関連する要因を明らかにすることを目的とした調査を2012年度に実施した。調査対象は神奈川県S市の体操会に参加している地域在住高齢者とした。自記式質問紙および面接調査、体力測定を実施した。統計解析は男女別、年齢区分別、追跡年数別に体操グループへの参加中止の有無を従属変数（継続=0/中止=1）とした、ステップワイズ法による多重ロジスティック回帰分析を行った。結果は、男女別において、男性では、片脚立位時間（オッズ比；0.95, 95%信頼区間（95%CI）；0.91–0.99,  $p=0.023$ ）、女性では転倒自己効力感尺度得点（オッズ比；1.101, 95%CI；1.003–1.207,  $p=0.042$ ）が体操グループへの参加中止に関連する要因として抽出された。年齢区分別では、体操グループへの参加中止に関連する要因は抽出されなかった。追跡年数別では、2年後では、ベースライン調査時のBMI（オッズ比；0.68, 95%CI；0.47–0.99,  $p=0.044$ ）、OLS（オッズ比；0.97, 95%CI；0.94–0.99,  $p=0.027$ ）、WHO-5（オッズ比；0.80, 95%CI；0.65–0.99,  $p=0.038$ ）の3項目、3年後では、OLS（オッズ比；0.97, 95%CI；0.94–0.99,  $p=0.037$ ）、FESI（オッズ比；1.07, 95%CI；1.01–1.14,  $p=0.039$ ）が抽出された。

上記の内容に関して、第48回日本理学療法学会で、追跡年数別での研究結果の報告を行い、第20回国際老年学会で年齢区分別での研究結果を報告した。

### (2) 自主参加型体操グループへ参加している地域在住高齢者における腰痛・膝痛の有無と運動機能および精神的健康の関係

本研究では、運動習慣のある地域在住高齢者を対象として、性別毎に疼痛の有無と身体機能、精神的健康の関係について横断的に明らかにすることを目的とした。対象は神奈川県S市のラジオ体操会会員から募集し、2009年から2013年まで毎年実施している体力測定に参加した65歳以上の地域在住高齢者171名（男性89名、女性82名、平均年齢 $72.4 \pm 4.6$ 歳）とし、各参加者の体力測定参加初年度の結果を分析し、横断的に検討した。参加者には体力測定および質問紙調査を実施した。性別ごとに、疼

痛の有無により2群に分類し、身体機能、WHO-5、FESIそれぞれをMann-WhitneyのU検定を用い2群間で比較した。また、疼痛の程度と各測定項目の相関関係を検討するため、Spearmanの順位相関係数を用い分析した。

腰痛を有する者は男性17名（19.1%）、女性14名（17.1%）であり、膝関節痛を有する者は男性15名（16.9%）、女性16名（19.5%）であった。腰痛有群と腰痛無群では、男性において、年齢（ $p=0.013$ ）、開眼片脚立位時間（ $p=0.04$ ）、Timed Up and Go Test（ $p=0.02$ ）、5m快適歩行時間（ $p=0.02$ ）、5m最速歩行時間（ $p<0.01$ ）が統計学的に有意な差を示した。また、女性においては立位体前屈（ $p=0.006$ ）のみ2群間で有意な差が確認された。膝痛の有無の群間比較では、男性で5m快適歩行時間（ $p=0.01$ ）、WHO-5精神的健康度評価表得点（ $p=0.006$ ）の2項目に有意差が認められた。女性では、すべての項目で有意差は確認されなかった。疼痛の程度と各測定項目では、女性において膝痛の程度と膝伸展筋力（ $r=-0.608$ ,  $p=0.012$ ,  $n=15$ ）の間にもみ統計学的有意な中等度の相関が確認された。

2013年度についても、調査を継続し上記の結果となった。本研究については、第49回理学療法学会大会（2014年5月）にて口述発表することとなっている。

### 3. 研究業績

#### 【学会発表】

- 1) 第48回全国理学療法学会大会（名古屋大会）口述発表

表題『地域在住高齢者における自主参加型体操グループへの参加中止に関連する要因と要因の経年変化』

- 2) 第20回国際老年学会（ソウル大会）ポスター発表

表題『Factors related to dropout from a voluntary exercise group are different among community-dwelling elderly of different age groups』

## 1. 研究課題

特別養護老人ホームにおける看取り介護期の機能訓練指導員の役割に関する研究

## 2. 研究活動の概要

本研究課題は特別養護老人ホームの機能訓練指導員が看取り介護期における役割に関してまとめた上で学会にて報告したものである。

## 3. 研究業績

### 【学会発表】

- 1) H. Ueda, Role of activity-of-living advisers at terminal care in nursing homes, the 46th Australian Association of Gerontology National Conference, 27–29 November 2013, Sydney.

## 1. 研究課題

- (1) 高齢者の居場所の研究
- (2) 高齢者の健康生活診断指標に関する研究

## 2. 研究活動の概要

### (1) 高齢者の居場所の研究

高齢者が日中過ごす場所や、過ごす場所での居心地、過ごし方と健康との関連について継続して研究している。高齢者が利用できる自由性の高い日中過ごす場所のひとつである「福祉センター」をフィールドとした「老人福祉センターを利用することによる『よりよい健康』を維持する効果」(2009)、高齢者の利用状況や過ごし方における利用継続の可能性(2010)、老人福祉センター利用のきっかけとなる動機(2011)を基盤として福祉センターを居場所とした高齢者が「いくつにみえる?」と聞くことばに潜む心情(2012)を考察した。これらの研究を発展させるために、高齢者の過ごす場所(居場所)の先行研究をふまえた課題を考察し「高齢者を対象とした居場所の研究の実態と課題」を学会で発表した。

### (2) 高齢者の健康生活指標作成に向けての研究

小玉敏江先生を代表とする「高齢者生活診断の指標の作成にむけての研究」において共同研究者として聖路加看護大学老年看護研究会に参加し、介護支援専門員を対象として高齢者への質問表内容について表面妥当性の検討(2010)、高齢者を対象として質問表内容の使用感についてインタビューを行った(2011)。有用性のある結果が得られ「高齢者の健康生活診断の診断指標およびウェルネス型アセスメントの枠組みに関する研究：診断表の作成と有用性の検討」(2012)を学会で研究協力者として発表した。現在、上記研究会で投稿に向けて検討している。

## 3. 研究業績

### 【学会発表】

- 1) 上野佳代、長田久雄、菊池和美；高齢者を対象とした居場所の研究の実態と課題 第55回日本老年社会学会；大阪(2013)

## 1. 研究課題

地域高齢者におけるスポーツ実施率増加プロセスに関する実証研究

## 2. 研究活動の概要

「生涯学習に関する市民アンケート」を活用して、住民協働によるスポーツ推進計画の本計画のプロセス評価のベースラインとした。日本健康教育学会において、プロセス評価に必要な項目を検討し、スポーツ実施率の地域分布を運動生態学的手法により検討した。

## 3. 研究業績

### 【学会発表】

- 1) Egawa K, Relation between family health status and familial physical activity habit in parent and child : an exercise ecological study in Japan. International Society for Behavioral Nutrition and Physical Activity, ISBNPA 2013, May 22-25th, 2013, Ghent, Belgium, Abstract book, 386-387.
- 2) 江川賢一 住民協働によるスポーツ推進計画に基づくスポーツ実施率増加に関する実証研究. 第22回日本健康教育学会学術大会講演集、p.109.
- 3) 江川賢一 子育て世代家族の主観的健康度と親子の自発的運動習慣との関係性 - 無作為抽出標本による生態学的検討 - 第68回日本体力医学会予稿集、p.152.

### 【科研費などの助成金】

- 1) 公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団第7期生スポーツチャレンジ研究助成：住民協働によるスポーツ推進計画に基づく健康なまちづくり - スポーツ実施率増加プロセスに関する実証研究 - (代表者)

## 1. 研究課題

- (1) 高齢者とメディア
- (2) 高齢者とコミュニケーション

## 2. 研究活動の概要

### (1) 高齢者とメディア

高齢者がメディアの中でどのように描かれているのかを検証する。また、寝たきりや痴呆・介護など、社会的弱者のイメージがクローズアップされがちな高齢者の“自立した姿”を発信するとともに、高齢者向けの生活情報を紹介する。

### (2) 高齢者とコミュニケーション

高齢者とコミュニケーションをはかるときの効果的な音声表現について研究し、その成果を発信する。

## 3. 研究業績

### 【著書】

- 1) 「テレビ報道職のワークライフアンバランス」(共著 2013.11 大月書店)
- 2) 「自分を伝える話し方」(単著 2014.2 樫出版社)

### 【その他の業績】

- 1) 講演「華齢・朗齢・好齢人生」(2014.1 青森県六ヶ所村)
- 2) 番組制作「聞いて聞かせて」(NHKラジオ第二放送)
  - ① 「あきらめなければ道はひらける IBM研究者・浅川智恵子さん」(4/18放送)  
視覚障害者や高齢者、また貧困のために字の読めない人でも情報を入手するための研究・開発について紹介。
  - ② 「メイクから婚活まで自立をお手伝い 社団法人理事・石井暁子さん」(6/16放送)  
障害者や高齢者に向けた自立支援を行っている石井さんの活動を紹介
  - ③ 「誰もが楽しめる共有玩具を 玩具メーカー・高橋玲子さん」(10/20放送)  
共有玩具とは、目の見えない子ども耳の聞こえない子どもも一緒に楽しめるおもちゃのこ

と。その開発に携わっている高橋さんの活動を紹介。障害者を対象におもちゃの貸し出しを始めたところ、子どもだけではなく高齢障害者からの反響が大きかった。

3) 大学の授業内で、高齢者とのコミュニケーションに関する講義を実施

麻布大学「口述表現」

桜美林大学「口語表現Ⅰ」

東京国際大学「キャスター演習Ⅰ」

フェリス学院大学「放送文化と制度」

放送大学「スピーチとコミュニケーション」



## 1. 研究課題

介護老人福祉施設における介護職と看護職の協働に関する研究

## 2. 研究活動の概要

介護老人福祉施設における介護職と看護職の協働に関する研究

### ①調査票の見直しについて

過去の文献を再度洗いなおすと共に、修論をまとめた時期以降に発表された先行研究について検索した。時間的余裕がなく、また、十分に文献を検索するツールが不足し、十分に検索できなかった。

### ②調査対象施設の拡大について

介護老人福祉施設2施設に調査依頼について打診し、内諾を得ている。  
調査票完成次第、改めて依頼する予定である。

## 3. 研究業績

特になし

## 1. 研究課題

ホワイトカラーのキャリアをもつ女性の定年後のキャリア選択：現役時代のキャリアの影響

## 2. 研究活動の概要

- ・本研究の目的：ホワイトカラーのキャリアをもつ女性を対象に，定年後に系列企業以外に就業（転職または起業・自営）する道を選択した要因を現役時代のキャリアとの関連において明らかにすること
- ・本研究の対象：6名
- ・調査方法：質的調査
- ・分析方法：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ
- ・分析結果：現役時代のキャリアは，仕事優先の人生の選択とそれに対する強い自己肯定感，内発的な仕事の意味づけ，技能への自信と就業機会の引き寄せ行動という3点において，定年後のキャリア選択に大きな影響をもっていたことが示された

## 3. 研究業績

### 【論文】

- 1) 「ホワイトカラーのキャリアをもつ女性の定年後のキャリア選択：現役時代のキャリアの影響」桜美林大学老年学研究科紀要2014年

## 1. 研究課題

有料老人ホームに居住する高齢者の精神的健康に与える社会的ネットワークの効果

## 2. 研究活動の概要

本研究は、有料老人ホームに居住する高齢者を対象に、精神的健康に対する社会的ネットワークの影響を検討することを目的とした。分析対象者は、介護付き有料老人ホームに居住し、認知機能に問題のない27名であった。精神的健康はGeriatric Depression Scale (GDS) で評価し、社会的ネットワーク指標には、現在だけでなく、入居前後における変化も加えた。分析例数が少ないため、GDS得点と各社会的ネットワーク指標との関係の強さは、交絡要因と考えられる要因のうち、GDS得点と各社会的ネットワーク指標の両方に影響する要因である老研式活動能力指標の影響を調整した偏相関係数を用いて評価した。分析の結果、現在における親族との交流頻度が有料老人ホームに居住する高齢者のGDS得点と高い偏相関（有意水準； $P<.10$ ）を示した。その方向性は仮説に反し、親族との交流頻度が多いほどGDS得点が高いというものであった。この結果は、老年学雑誌に投稿した。

## 3. 研究業績

### 【その他の社会的活動】

- 1) 八王子市地域福祉推進協議会委員
- 2) 八王子市地域福祉推進計画地域福祉推進部会委員

## 1. 研究課題

ソフトマッサージ（タクティールケア）が高齢者の脳活動に及ぼす有効性に関する研究：光トポグラフィ（NIRS）を用いた検討

## 2. 研究活動の概要

増加する認知症高齢者の脳機能の維持・改善に対する効果を明らかにするために、高齢者に対するタクティールケアの脳活動に関する効果を明らかにしていきたい。

前年度に健常女性を対象に行った脳波を用いたタクティールケアの効果では、タクティールケア介入中は入眠効果やリラクセス効果などが認められたこと、以前、認知症高齢者を対象にタクティールケアを実施した場合には攻撃性が改善した。以上のことから、高齢者を対象にタクティールケア介入後に脳機能の改善の効果があることが予測されるため、タクティールケアを行うことで、脳血流量がどのように変化するのか、光トポグラフィを用いて脳機能評価を行い、それを明らかにした。

2014年度日本看護研究学会で発表予定

## 3. 研究業績

### 【その他の研究活動】

- 1) 日本看護研究学会で下記2題発表
  - (1) タクティールケアの生理機能および心理的側面に及ぼす効果（第一報）：自律神経・脳活動に及ぼす影響
  - (2) タクティールケアの生理機能および心理的側面に及ぼす効果（第二報）：健康関連QOL・気分 に及ぼす影響
- 2) 木本明恵：月刊ケアマネジメント「スウェーデン発認知症にも「緩和ケア」の理由」, 環境新聞社.

## 1. 研究課題

- (1) 在宅高齢者の食生活改善活動の検討
- (2) アンチエイジング栄養セミナー実施

## 2. 研究活動の概要

### (1) 在宅高齢者の食生活改善活動の検討

現在、介護保険制度において、地域の高齢者のうち要支援・要介護になるおそれのある高齢者を対象に、栄養改善プログラムを含む介護予防事業が全国で実施されている。高齢になると咀嚼能力や消化・吸収率が低下し、食事摂取量の低下や栄養の偏りにより、体力の低下をきたしやすくなることから、低栄養のリスクのある自立した在宅高齢者に対して、疾病の改善や健康維持などの介護予防のための食生活改善活動が重要となっている。

高齢者の低栄養の原因としては、噛む力の低下や体重減少、腰痛や膝痛等から日常生活活動が低下するなどの身体的要因、家族や友人との交流の減少の他、経済等の社会的要因、認知症やうつ状態などの精神的要因、その他、病気、怪我、手術など、多くの因子が絡み合っている。

本研究では、高齢者を対象に、独居と同居の家族構成から捉えた食習慣や食生活の意識等実態を検討した。また、高齢者の食生活の実状を研究し、栄養指導を行うことで、低栄養の改善と予防を図るため、介護予防事業において食生活改善活動を実施した。

1コース2回の栄養改善プログラムを7コースにわたり42人の人に高齢者1次介護予防事業を実施した。

1コース6回の栄養改善プログラムを3コースにわたり41人の人に高齢者2次介護予防事業を実施した。

### (2) アンチエイジング栄養セミナーの実施（華学園栄養専門学校主催・台東区市民公開講座）

高齢者の多くは、テレビ等のマスメディアの過大なPRにより、断片的な栄養知識をもっているものの、基礎的な栄養教育を受けた経験が少ないことで、疾病予防や健康維持のための基本的な食生活の知識や実践手法を十分にもたない人が多い。本事業は、地域高齢者の自立した食生活を支援するため、栄養知識や料理の工夫などの教育手法を取り入れた健康づくり教室を実施することで、栄養専門学校の利点を活かして地域高齢者の健康づくりに貢献するものである。

年3回にわたり地域高齢者延べ15人と管理栄養士科学生40人に食生活や栄養に関する講習会を実施した。

### 3. 研究業績

#### 【研究ノート】

- 1) 久喜美知子：高齢者の健康づくり事業の実施と管理栄養士科学生の体験学習の試み，華学園栄養専門学校研究紀要 第2巻第1号，p 27-34，学校法人 華学園 華学園栄養専門学校，平成25年6月15日

#### 【学会発表】

- 1) 久喜美知子：高齢者の健康づくり事業における管理栄養士科学生の体験学習の試み，日本栄養改善学会，平成25年9月13日，神戸国際展示場

#### 【その他の研究活動】

- 1) 相模原市桜まつり

相模原市制施行20周年記念行事として実施しているイベントに相模原市栄養士会役員として参加

日時：平成25年4月7日（日）午前10時から16時

場所：相模原市役所さくら通りにテントブースを設置

内容：体脂肪測定や生活習慣病予防のリーフレットを配布しながら栄養相談実施

参加者：体脂肪測定実施者563名（男性181名、女性382名）

- 2) 第4回食育フェア（相模原市主催）

相模原市食育推進計画に基づき実施したイベントに相模原市栄養士会役員として参加

日時：平成25年11月2日（土）午前10時から15時

場所：JR横浜線古淵駅近くのイオン相模原店1階のパブリックスペース

内容：クイズラリーと塩分官能ソルセイブ検査と薄味料理の栄養相談

参加者：塩分官能検査参加者184名（男性46名、女性138名）

大人124名（平均年齢43.04±9.2歳）子供60名（平均年齢7.3±2.8歳）

## 1. 研究課題

- (1) 高校生と中高年を対象としたボディワークの心理的研究—新規開始者を対象に—
- (2) 相談援助の基礎学習としての「人間関係力向上プログラム」の実施と効果に関する報告
- (3) 人間関係ワークと身体感覚ワークのプログラムが気分を与える影響  
—ムーブメントを基本にからだからのアプローチ—

## 2. 研究活動の概要

### (1) 高校生と中高年を対象としたボディワークの心理的研究

本研究は、クリニックの運動療法で考案されたボディワークのヨガを使って、新規開始者の高校生と中高年を対象にメンタル面での気分や感情の前後の変化を、検討することを目的とした。高校生と中高年の開始前後において2要因の分散分析を行った結果、年代に関係ないヨガであることが示唆された。「快適度」は年代に関係なく快適で明るい気分状態になったことが明らかになった。開始前後では「安定度」「快適度」の気分が改善した結果になり「覚醒度」は低覚醒の状態が示唆された。よく眠れるという報告からも緊張を弛緩させるプログラム構成が考えられる。からだの内側に意識を向けるヨガは、年代に関係なく、新規開始者（高校生・中高年共）に、メンタル面でのゆったりと落ち着き、快適な気分になることが明らかになった。今後は低覚醒について継続的な検討や、ヨガの経験者、高齢者を対象に他の尺度との検討を予定している。

### (2) 相談援助の基礎学習としての「人間関係力向上プログラム」の実施と効果に関する報告

本研究の目的は、「ありのままの自分を受容し、他者を理解し、信頼し、他者に貢献する人間関係力向上プログラム」の実施方法を伝え、その効果を明らかにすることである。「実習のための社会福祉入門」の授業の中で、相談援助の基礎学習として位置づけ、直接的にはボランティア体験学習に向う際の事前学習を目的とした、自己理解、他者理解を中心としたコミュニケーションの本質的な力を高めることを意図した「人間関係力向上プログラム」と、車いすの操作や障害をもった当事者との接し方、高齢者との会話方法について学ぶといった技術的なコミュニケーション力を意図した「一般ワーク」を実施した。「人間関係力向上プログラム」は、「一般ワーク」と比較して「本来感」を高め、「社会的情動スキル」の一因子である「他者感情の気づき」を高める傾向がみられ、コミュニケーションの「本質」的な力を高めるプログラムであることが示唆された。

春学期、新入生を中心に行われる授業であるため、新入生の新たな環境への不適応感を緩和するプログラムとしての効果も期待される結果を得た。今年度も継続中である。

### (3) 人間関係ワークと身体感覚ワークのプログラムが気分に与える影響

本研究では、首都圏の私立大学に在学する大学生を対象に、サイコドラマの源流があるプレイバック・シアターのウォーミングを参考にした人間関係ワークと、クリニックの運動療法で考案されたボディワークを参考にした身体感覚ワークの2群が、気分や感情に与える影響を検証するため実施を行った。その結果、からだを動かしておこなう2群のプログラムは、1回目2回目とも「緊張と興奮」「疲労感」「抑うつ感」「不安感」に低下がみられ、「爽快感」は上昇した。2回目の交互作用が認められた「緊張と興奮」「不安感」は人間関係ワークよりも身体感覚ワークが低減させることが明らかになった。「爽快感」はどちらも高めるワークとして示唆された。身体感覚ワークによる、「緊張と興奮」「不安感」は、先行研究でも明らかにしている結果と同じになった。また、回数を重ねることとさらに気分や感情に改善がみられた。今後は2群のプログラムを組み合わせたプログラム開発が、対人関係をもちにくい新入生に初期不安を緩和できることを期待している。

## 3. 研究業績

### 【学会発表】

- 1) 久米喜代美、高校生と中高年を対象としたボディワークの心理的研究 – 新規開始者を対象に – 2013.9.7 日本健康心理学会第26回大会発表論文集、日本健康心理学会、北星学園大学
- 2) 日本健康心理学会 第26回大会会員企画シンポジウム「児童虐待の養育者の心理社会的要因と児童虐待防止への健康心理学的アプローチの試み」企画者
- 3) 久米喜代美、人間関係ワークと身体感覚ワークのプログラムが気分に与える影響 – ムーブメントを基本にからだからのアプローチ – 2014.1.26 日本学校メンタルヘルス学会第17回大会発表論文集、日本学校メンタルヘルス学会、帝京大学

### 【その他の研究活動】

- 1) 人間関係力向上プログラムの実施と評価に関する研究（共同研究）
- 2) 日本健康心理学会 児童虐待防止研究部会
- 3) 相模原市高齢者福祉課「あじさい大学」健康講座講義と実践（連続講座）
- 4) 相模原市男女共同参画推進センター「リタイア世代の健康管理」講義と実践



## 1. 研究課題

地域後期高齢者における加齢に伴う逆境からの回復プロセス

## 2. 研究活動の概要

自治会・NPO等地域団体の会議や行事に参加し、状況の把握、住民の方々との接触を行った。そのことにより顔見知りが増え、地域活動や高齢者の生活の様子を把握することができた。

予備的なインタビューを女性2名に行った。地域活動、単身生活、疾病等との関わりにおいて、重大な出来事、困難、ストレス、どのように感じるか、対処法、隣人・町会などの手段的・情動的・情緒的サポート、サポートの互惠性等について聞き取った。その結果をもとに、疾病があり単身生活をする男性1名インタビューを行い、逆境からの回復プロセスを質的に分析した。

## 3. 研究業績

### 【学会発表】

- 1) 第28回ヨーロッパ健康心理学会ポスター発表（投稿中）2014.8月、オーストリア・インスブルック
- 2) 日本老年社会科学会第56回大会ポスター発表2014.6.7～8、下呂交通会館アクティブ

### 【科研費などの助成金】

- 1) 公益在団法人在宅医療助成勇美記念財団（代表者）

### 【その他の研究活動】

- 1) 研究フィールドにおける小講演。町会主催行事「老年学の話」、社協主催行事「映画にみる老年学」。
- 2) 研究フィールドにて地域のNPO主催リハビリ教室、自治会行事、社協主催食事会、団体の定例会議等に参加。

## 1. 研究課題

日常生活活動動作の「自立度」と「困難感」を包括的に評価する指標の開発

## 2. 研究活動の概要

地域在宅高齢者の約9割は基本的日常生活活動（BADL）動作が自立している。しかしながら、BADLが自立しているものの、主観的な「困難感」を伴う者が存在し、これら的高齢者は生活機能が低下し、かつ、将来の施設入所や死亡のリスクが高いことが報告されている。そのため、BADL能力を客観的な「自立度」と主観的な「困難感」の両面から評価することが有用と考えられる。地域在宅高齢者のBADL動作の「自立度」と「困難感」に関する障害の出現頻度や因子構造を調査し、新たなBADL能力の評価指標を開発することを目的とした研究活動を行っている。

現在、本研究の実施に関して本学の研究倫理委員会の審査を受けている。本研究が認可されたら、群馬県嬭恋村の要介護認定を受けていない地域在住高齢者、ならびに、都市近郊在住の要介護高齢者を対象とした調査を開始する予定である。

## 3. 研究業績

### 【学会発表】

- 1) 齋藤崇志, 大森祐三子, 大森豊: 在宅要介護高齢者に対する訪問リハビリテーション実施後のBarthel Index改善に関連する要因の検討. 第48回日本理学療法学会(名古屋). 2013年5月24日.
- 2) 森本和宏・齋藤崇志・新井健司・大森祐三子・大森豊: 在宅要介護高齢者を対象とした2.4m歩行テストの検者内信頼性, 検者間信頼性の検討. 第32回関東甲信越ブロック理学療法士学会(千葉). 2013年11月2日.
- 3) 藤田直樹・齋藤崇志・安藤誠・大森豊: 訪問理学療法を利用する高齢者を対象とした運動機能テストの実現可能性に関する検討. 第32回関東甲信越ブロック理学療法士学会(千葉). 2013年11月2日.
- 4) 笠原みどり・齋藤崇志・新井健司・大森祐三子・大森豊: 脳血管疾患の再発予防に着目して訪問リハビリテーションを実施した1例. 第32回関東甲信越ブロック理学療法士学会(千葉). 2013年11月2日.

**【その他－研修会講師】**

- 1) 「福祉用具導入にあたってのセラピストの役割」、神奈川県理学療法会 PT・OT福祉用具スキルアップ研修会、2013年8月4日
- 2) 「訪問リハ場面での危険予知トレーニング（KYT）」、埼玉県理学療法士会 第12回訪問リハビリテーション研修会、2013年11月9日

## 1. 研究課題

認知症高齢者への笑いの体操（笑いヨガ）の効果の検討

## 2. 研究活動の概要

デイサービスで、職員が運動やレクリエーションの時間に笑いヨガを提供したところ、認知症であっても参加することができ、手が上がるようになってきた、会話が増えた、大きな声が出るようになった等の変化がみられた。

また、笑いの体操の導入で、職員と利用者との関係性の変化がみられた。2014年度は、東京・鳥取計4事業所の利用者を対象に、どのようなアプローチがどのような行動変容につながるのかを考察する。

## 3. 研究業績

### 【著書】

- 1) 『ボケないための笑いヨガ』（春陽堂）2013年12月

### 【学会発表】

- 1) 日本笑い学会 『認知症と笑い』

### 【その他の研究活動】

- 1) 講演：日本介護福祉士会全国大会記念講演・日本創造性学会特別講演・青森県看護協会他多数

## 1. 研究課題

- (1) 急性期病院における術後高齢大腿骨近位部骨折患者の自宅退院に関連する要因
- (2) 転倒リスクの指標としての下腿周位径-Calf Ankle Indexとしての検討-
- (3) Calf Ankle Indexと身体機能および予後との関連
- (4) 人工膝関節全置換術施行患者の術前後におけるバランス能力の変化

## 2. 研究活動の概要

### (1) 急性期病院における術後高齢大腿骨近位部骨折患者の自宅退院に関連する要因

大腿骨近位部骨折受傷後、急性期病院において手術を施行した症例を対象とし、リハビリテーション実施後、手術した病院から直接自宅に退院した群と回復期医療施設に転院した群の2群に分類し、直接の自宅退院に関連する要因について検討した。

現在、日本応用老年学会に資料論文として投稿中。また、第49回日本理学療法学会（横浜）にて発表予定。

### (2) 転倒リスクの指標としての下腿周位径-Calf Ankle Index としての検討-

地域在住高齢者を対象とした転倒予防教室に参加した症例を対象とした。下腿周位径の最大値と最小値の比をとりCalf Ankle Indexとし、転倒との関連について検討中。

教室初回介入時のCalf Ankle Indexと、転倒と関連があるとされているTimed up and go testと転倒リスク評価票との間に相関が認められた。

今後、実際の転倒との関連について縦断的に調査していく。

### (3) Calf Ankle Index と身体機能および予後との関連

急性期病院において入院で心臓リハビリテーションを実施している患者、および外来で呼吸リハビリテーションを実施している患者を対象とした。下腿周位径の最大値と最小値の比をとりCalf Ankle Indexとし、身体機能および予後との関連について検討中。

急性心筋梗塞患者のCalf Ankle Indexと嫌気性代謝閾値レベルの酸素摂取量に相関が認められたことを第19回日本心臓リハビリテーション学会（仙台）にて発表した。

慢性心不全患者のCalf Ankle Indexと再入院の関連について第20回日本心臓リハビリテーション学会（京都）にて発表予定となっている。

呼吸リハビリテーション患者については、2014年度以降、調査を実施していく予定。

#### (4) 人工膝関節全置換術施行患者の術前後におけるバランス能力の変化

変形性膝関節症にて、急性期病院で人工膝関節全置換術を施行した症例を対象とし、術前およびリハビリテーション実施後、退院直前に重心動揺検査を実施。その変化について検討した。

初回人工膝関節全置換術実施例は術前と比較して、術後に重心動揺に関するパラメーターは悪化傾向にあったが、2回目の人工膝関節全置換術実施例は術前と比較して術後に改善傾向にあったことを、第40回日本臨床バイオメカニクス学会（神戸）にて発表した。

### 3. 研究業績

#### 【学会発表】

- 1) Calf Ankle Indexと運動耐容能の関係－急性心筋梗塞患者における検討－

第19回日本心臓リハビリテーション学会学術集会（仙台）2013年7月13日～14日

- 2) 変形性膝関節症患者のCalf Ankle indexと移動能力の関係

第32回関東甲信越ブロック理学療法士学会（東京）2013年11月2日～3日

- 3) 人工膝関節全置換術前後のバランス能力について－初回例と2回目例の比較－

第40回日本臨床バイオメカニクス学会（神戸）2013年11月22日～23日

## 1. 研究課題

介護予防・地域支え合い事業のアクティビティ・ケアプログラムに関する研究

## 2. 研究活動の概要

昨年度のフィールドワークを継続して実施中。今年度はアクティビティ・プログラムの地域での多様性をさぐるためグループホームでのアクティビティ・プログラムに参加。神奈川県A市にある地域高齢者によるボランティアグループと共にBグループホームでのアクティビティ・プログラムの企画と実施に携わる。

## 1. 研究課題

- (1) 女性定年退職者の生活と考え方
- (2) 地方自治体の高齢者に対する具体的な施策

## 2. 研究活動の概要

### (1) 女性定年退職者の生活と考え方

情報収集（セミナー参加）

- ・ 第55回日本老年社会科学会（6月4日、5日、6日）  
於：大阪国際会議場
- ・ 国際シンポジウム「少子高齢化をアドバンテージに変えるには  
日独が目指す新しい社会・労働政策の形」（6月21日）  
国際交流基金・（ドイツ）コンラート・アデナウアー財団共催  
於：国際交流基金（四谷「さくら」）

### (2) 地方自治体の高齢者に対する具体的な施策

- ・ 武蔵野市地域包括支援センター運営協議会委員会出席（5月24日及び12月12日）
  - ・ 三鷹市 高齢者生活実態調査 実施補助（平成25年9月）
- 情報収集（セミナー参加）
- ・ 「都市コミュニティを救うシニアの力」（11月12日）  
主催：ダイヤ高齢社会研究財団 於：新宿文化センター
  - ・ 「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」（平成26年2月11日及び3月7日）  
主催：独立行政法人 科学技術振興機構 於：日経ホール

## 3. 研究業績

特になし



## 1. 研究課題

地域における認知症予防に関する研究：

- ①認知症の知識を普及させる活動の中での研究
- ②認知症の人に非薬物療法を提供する効果についての研究
- ③自分の認知機能低下を感じながら、自ら医師の診断を受けようとしなない人に、医師の診断が必要と自覚させる方法を開発する研究

## 2. 研究活動の概要

①については、町内会、地域包括支援センター、自治体の要請を受けて、認知症に関する講演会を行った。内訳は後に示す表にある。この中で認知症についての理解を高めるプレゼンテーションの方法などを研究した。

②については、回想法をグループホームで継続して毎週行っていることと、13年3月から5月に行った特別養護老人ホームでの回想法がある。回想法の提供がどのような効果をもたらすかを研究した。

③について、ここでは詳述したい。認知症の疑いがある人は、早期に医師の診断を受け、適切な処置をすることが必要だと言われている。認知能力の低下は、多くの場合本人が気づいている、と考えられる。しかし自ら進んで医師の診断を受けようとする人は多くない。その理由は、治療できず、悪化するのみと信じている認知症に自分になっていると告知される恐れと、自分の物忘れを認知症の記憶障害ではなく、歳による物忘れと考えたいという願望があるからである。

病院へ行きたがらない本人を、どのようにして連れて行くかは、多くの家族が悩む問題である。風邪などの病気で医師へ診てもらうとき、医師に依頼しておいて認知症についても診てもらう、などの工夫が一般的に行われている方法である。

しかし本人が自覚して、自ら進んで医師に診てもらうことが望ましい。この方が病気に立ち向かおうとする姿勢が取れるからである。

これを実現するには2つの条件が必要である。1つは、早く診断を受け、必要な処置をしてもらう利点を理解することと、自分の認知機能の状態について客観的な評価が、他人に知られることなく自分でできることである。

私は認知症に関する講演を地域で行う中で、この2つをワンセットとした方法を開発した。ここでは後者の条件についてのみ述べたい。

この方法は体温計になぞらえることができる。「今日は熱があるのかなあ」と思ったとき、われわ

れは体温計で体温を測る。そして例えば37度3分だったら、「今日は微熱があるから、お医者さんに診てもらおう」と自分の異常を自覚し、自ら医師へ行くという選択をする。この体温計と同様の働きをするのが長谷川式認知症スケールである。「自分の認知機能は低下しているのではないか」という疑いを持つ人に、20点以下であれば認知症の疑いがあるという客観的な判断基準を与えるからである。

しかし長谷川式認知症スケールは専門家またはそれに準ずる人に1対1でやってもらう必要がある。わざわざ依頼しなければ行えず、他人に自分の状態が知られることになる。「他人に結果を知られることなく、長谷川式認知症スケールで自分の状態を知りたい。」このようなニーズは大きい。

希望する人が多く、「結果を他人に知られたくない」となれば、認知症の講演会などで、多くの人を対象にやることができ、採点は自分でやれる方法を工夫する必要がある。そのような方法を、パワーポイントを利用して創り出し、14年3月2日に上永谷コミュニティハウスで行った認知症に関する講演の後に初めて実施した。23人を対象にし、その中に20点以下の人が3人いることが明らかとなった（各人の点数だけは無記名で提出してもらった）。

この方法には正確性という点でいろいろ問題がある。自分で採点するのであるから、意図的に点数を修正することができる。100から7を順に引いていく問題では、最初の答え93を書くので、次の引き算は93という数字を見ながら行うことになる。また自分の年齢が正しいか採点する方法として、生年月日は正しく覚えていることが多い、ということを利用して、生年から年齢をチェックする方法を採った。

そのような問題を抱えながらも、このテストを受けることにより、自分の認知機能の程度についてかなり客観的な見方ができるようになる、と思う。そして「認知症は早く専門医に診てもらい、早く治療することによって、悪化が防げる。」「軽度認知障害は治る。」という情報を講演会で与えることと相俟って、自ら医師の診断を受けようという意欲が湧くひとが増えるものと期待している。

今後は認知症の講演会の場で実施してデータを蓄積すると共に、できる限り問題を解決する方法を工夫したい。

### 3. 上記1 および2に関連して活動したこと

#### ①自治会など主催の講演会

年 月 日	主 催 者	講 演 テ ー マ
13年 6月 18日	横浜市港南区ルネ上大岡	認知症とは何か、予防法は
13年 7月 2日	横浜市港南区ルネ上大岡	心を結ぶ傾聴を学ぶ
13年11月19日	横浜市港南区ルネ上大岡	回想法の理論と実技

②地域包括支援センターなど主催の講演会

年 月 日	主 催 者	講 演 テ ー マ
13年 5月30日	藤棚地域ケアプラザ(横浜市西区)	傾聴の理論と実技
13年6月8日 ～6月29日	戸部本町地域ケアプラザ (横浜市港南区)	講座「回想法」(4回)
13年 7月 8日	下野庭コミュニティハウス (横浜市港南区)	認知症を知り、予防しよう
14年3月 2日	上永谷コミュニティハウス (横浜市港南区)	どうすれば認知症は予防できるか

③自治体、企業、団体などからの依頼によるもの

年 月 日	主 催 者	講 演 テ ー マ
13年 9月25日 ～12月8日	川崎市役所高齢者福祉課	傾聴の理論と技法およびボランティア活動
13年12月 6日	傾聴ボランティアグループ 「モモ」(横浜市瀬谷区)	認知症は予防できる

④回想法の提供

期 間	施 設 名	回 数
13年 4月 1日～ 14年 3月31日	グループホーム「さくら」(横浜市南区) で毎月曜日グループ回想法を継続実施	50回
13年3月6日～ 4月24日	特別養護老人ホーム「よつば苑」(横浜市保土ヶ谷区)の認知症棟でグループ回想法を実施	8セッション

## 4. 研究業績

### 【論文】

- 1) 桜美林大学大学院老年学研究科紀要「老年学雑誌」第4号に掲載される予定  
タイトル「1研究事例に基づく混合研究法の考察」

## 1. 研究課題

- (1) 高齢者のQOLと社会貢献の向上に資する研究
- (2) 活力ある高齢社会の構築に資する公共政策研究
- (3) 健康寿命延伸に資する公益ビジネス政策研究

## 2. 研究活動の概要

- (1) **高齢者の QOL と社会貢献の向上に資する研究**  
産学公民協働型フィージビリティースタディーの推進
- (2) **活力ある高齢社会の構築に資する公共政策研究**  
地域公益活動団体と、地方公共団体との新・連携推進
- (3) **健康寿命延伸に資する公益ビジネス政策研究**  
健康増進産業クラスター形成の推進
- (4) **大衆長寿社会における老年学の普及、啓蒙に資する研究**  
高・大連携によるエイジング論共通科目化の推進

## 3. 研究業績

### 【著書】

- 1) 高齢社会の道案内 ジェロントロジー入門 (共編著、社会保険出版社、2013年9月刊)

### 【その他の研究活動】

- 1) 公共政策プロジェクト2011年10月～ 成熟社会総合フォーラム委員 (北海道庁)
- 2) 地方自治体でのエイジング教育に関するヒアリング、意見交換

## 1. 研究課題

- (1) シニアマーケット関連の調査、設計、実施、報告
- (2) 高齢者の特徴と犯罪に関する研究、犯罪防止啓蒙活動
- (3) 高齢者の安全に関する研究

## 2. 研究活動の概要

### (1) シニアマーケット関連の調査、設計、実施、報告

- ・高齢者をメインターゲットとする商品・サービスに関する市場調査、及び企画一式（調査設計・実  
査・分析・報告等）
- ・高齢者の行動調査の設計、実施、分析、等
- ・某リサーチ会社による、シニアマーケットに関する研究プロジェクトに参画。過去数十年に渡る  
データを基に、高齢者の消費行動を分析・考察
- ・一橋大学・第一生命 産学共同研究会メンバーとして参画

### (2) 高齢者の特徴と犯罪に関する研究、犯罪防止啓蒙活動

- ・警察政策学会の「超超高齢社会化研究会」に参画
- ・隔月で行われる研究会に参加
- ・研究会が主たるシンポジウム等に協力
- ・日本市民安全学会に参画
- ・市町村・学会等、依頼講演による啓蒙活動

### (3) 高齢者の安全に関する研究

- ・研究会参画等

## 3. 研究業績

### 【著書】

- 1) ジェロントロジー入門 「生・活」知識検定試験公式テキスト（一部執筆、監修）

## 【論文】

- 1) 堀内裕子. 超高齢社会の中で高齢者の安全を考える. 警察政策学会超超高齢化社会へ向けての安全・安心の創造に関する研究 2013; 第69号 (下) 151-159

## 【執筆・その他】

- 1) 堀内裕子. 発見「いいもの・いいこと」見つけてきました TECHNOプラス  
福祉介護 日本工業出版社  
No.44 4月 高齢者とスケールⅦ (エイジズム)  
No.45 5月 高齢者とスケールⅧ (老年症候群)  
No.46 6月 シニア市場の読み方Ⅰ  
No.47 7月 シニア市場の読み方Ⅱ「現在・過去・未来」①  
No.48 8月 シニア市場の読み方Ⅲ「現在・過去・未来」②  
No.49 9月 シニア市場の読み方Ⅳ「引き算消費」  
No.50 10月 シニア市場の読み方Ⅴ「心のゲート」  
No.51 12月 シニア市場の読み方Ⅵ  
No.52 1月 いまどきのシニアⅠ  
No.53 2月 いまどきのシニアⅡ -若返っている高齢者-  
No.54 3月 いまどきのシニアⅢ -インターネット世代?! -
- 2) 堀内裕子. 保険情報新聞「ジェロントロジーをもっと知りたい」  
2013年No.31~32 老年症候群の評価スケール-介護予防健診「おたっしゃ21」-
- 3) DVD: 株式会社映学社 文部科学省選定 日本市民安全学会推薦  
「ねらわれています!あなたも」多発する振り込め詐欺

## 【学会発表】

- 1) 堀内裕子, 塚原新一, 加治佐康代, 對馬友美子, 村田玲子, 山内智成, 宮本将典, 森本栄一; 「テレビコマーシャルの変遷から見る日本の高齢社会」  
第8回日本応用老年学会, 札幌市, 2013年11月9日
- 2) 堀内裕子; 「高齢者狙いの「振り込め詐欺」の防止のために」; 第10回日本市民安全学会,  
亀岡, 2014年2月22日

## 【講演】

- 1) 2013年5月22日：警察政策学会公開フォーラム  
「17年後のわがまちはどうなる？」：超高齢社会の現状と超超高齢化時代の到来
- 2) 2013年9月23日：浦安市助成金ステップアップ事業 浦安セーフティカレッジ  
「高齢者や子どもの安全・家の中に潜む危険とは」
- 3) 2013年10月17日：一橋大学・第一生命 産学共同研究会  
「ジェロントロジー（老年学）の視点からのシニア消費」
- 4) 2013年10月28日：公益財団法人 アジア生命保険振興センター  
シニアマーケットに対する生保の課題と戦略 「あなたはシニアを理解していますか？」
- 5) 2013年10月30日：第1100回 マーケティング創造研究会  
『ジェロントロジー（老年学）から見るシニア消費とマーケティング視点』
- 6) 2013年12月7日：インテリジェンス・デザイン合同セミナー  
「ジェロントロジー（老年学）から見るシニア消費とマーケティング視点」
- 7) 2014年2月4日：巣鴨地藏通商店街 ワークショップ有識者スピーカー
- 8) 2014年3月2日：神戸大学発達科学部アクティブエイジング・プロジェクト室  
第5回アカデミックサロン  
「「振り込め詐欺」あなたは大丈夫？」（老年学的視点の振り込め詐欺）
- 9) 2014年3月5日：みなと・しごと55 再就職等支援セミナー  
「元気で働くために、加齢を理解しよう」
- 10) 2014年3月14日：株式会社ビデオリサーチ コミュニケーションセミナー  
パネルディスカッション「未来予見～少し先のシニアを考える」

## 1. 研究課題

- (1) 看護（職）と介護（職）の連携の促進
- (2) 看護実践における経験知の集積と分析

## 2. 研究活動の概要

### (1) 看護（職）と介護（職）の連携の促進

10年間にわたり看護職と介護職の連携促進について看護・介護職を対象に研究を継続してきたが、そこから①看護職が医学的知識を高め、優れたケア技術に習熟すること。②看護職が介護職と日常生活ケアを協働すること。③看護・介護職双方が遠慮なく意見を出し合える「環境作り」が重要であること。の3つが抽出できた。今年はこの②について、看護・介護が一緒に働く中での会話を録音し、連携を高めるための介護の役割を分析・検討した。その結果、介護は適切に観察・判断を行い、看護に身体状況や処置、ケアなどに対する質問を行いながら身体・精神的ケアを実践していることが分析できた。

### (2) 看護実践事例における経験知の集積と分析

看護実践事例集積研究会（主任研究員 川島みどり日赤看護大学名誉教授）に所属している。専門雑誌（15誌）、学会報告集など事例報告に含まれる経験知を精練・集積して、「多くの臨床現場に活用できる看護技術」に技術化し、事例毎に命名して分類する作業していくことを目的に2002年5月から継続している。2007年4月1日に、ホームページを立ち上げた。これまで、861の個票をインターネット上で公開した。今年度は2年分（2008年）の131の個票を集積した。毎月、研究会を行い、個票作成を分担し、月1回の研究会でグループに分かれ2次チェックを行い、さらに3次チェックを経て、実践事例をウェブ上に公開している。これまで、文部科学省科学研究補助金（研究成果公開促進費を2009年から毎年受けている。



### 3. 研究業績

#### 【学会発表】

- 1) 前田志名子：看護・介護の連携場面における会話のやりとりから見えた介護の役割：第26回  
日本保健福祉学会学術集会（福岡）

#### 【科研費などの助成金】

- 1) 平成25年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）（代表者平松則子）

#### 【その他の研究活動・社会活動】

- 1) 相模原看護専門学校非常勤講師（老年保健論担当）
- 2) いなぎ苑（稲城市の介護老人福祉施設）において評議員
- 3) 介護認定審査会委員（東京都稲城市・世田谷区）
- 4) 東京スピリチュアルケア研究会（三澤久恵世話人）

## 1. 研究課題

- (1) 中年期にある人の自己老後像と向老意欲の質的研究
- (2) 中年期にある人の自己老後像と向老意欲の量的研究

## 2. 研究活動の概要

### (1) 中年期にある人の自己老後像と向老意欲の質的研究

本研究の目的は、中年期にある人の自己老後像を明らかにし、またその関連要因との関係性を明らかにする事である。その背景には、少子高齢化の進行に伴い、中年期にある人の高齢期はますます厳しい状況が想定されるからである。だからこそ、より早い段階で自身の老後を想定し、それに向かって主体的に努力するといった姿勢が求められる。

東京都在住の44歳から56歳の男女を対象として、2012年10月から2013年1月にわたってインタビュー調査を行った。インタビュー内容を逐語録に起こし、KJ法による分析を行った。当初、21名分のデータから中年期にある人の自己老後像の統合を試みたが、複雑な図解となったため、行った分析から見いだされたパターン別に統合をし、その差異を明らかにしていくことによってより多くの知見が得られると考えた。分析結果については、老年学雑誌に発表した。また、学会で発表予定である。

### (2) 中年期にある人の自己老後像と向老意欲の量的研究

本研究の目的は、質的研究で明らかにした中年期にある人の自己老後像と関連要因との関係性の結果を量的研究によって検証する事である。中年期にある人の自己老後像と向老意欲の質的研究の結果を元に量的研究を行い、中年期にある人の自己老後像はどのような要因の影響を受けるのか、また、向老意欲はどのような要因と関連しているのかを明らかにし、より主体的に高齢期に向かって努力していく方向性を探る事である。中年期にある人の自己老後像と向老意欲の質的研究を元に、質問紙を構成した。2013年9月に調査対象者のサンプリングを行い、12月に質問紙調査を実施した。現在、そのデータの整理及び入力作業を実施中である。

### 3. 研究業績

#### 【論文】

- 1) 松永博子、直井道子、中年期にある人の自己老後像の関連要因の質的研究；積極型と消極型の対比から、老年学雑誌、第4号、51-66、2014.

#### 【学会発表】

##### I. 一般発表

- 1) 松永博子、直井道子、中年期の人の高齢者観が自己老後像と向老意欲に与える影響；消極型と反面教師型との対比から、第56回日本老年社会科学会、岐阜、2014年6月

## 1. 研究課題

高齢者に関連した地域福祉に関する先行研究のレビュー

## 2. 研究活動の概要

「地域」「福祉」「コミュニティ」「地域を基盤とした」など、その先行研究を調べている段階です。

## 3. 研究業績

### 【論文】

- 1) 吉田綾子、杉澤秀博：特別養護老人ホームの介護職員の仕事継続プロセス－5年以上継続している介護福祉士の場合－、老年学雑誌、第3号、67－82、2013.



平成25年度研究活動報告

---

発行：桜美林大学加齢・発達研究所  
〒194-0294  
東京都町田市常盤町3758  
TEL. 042-797-2661(代)

発行日：平成26年3月31日

---

印刷：(有)片野印刷